

学内広報

for communication across the UT



特集：

- 表紙にみる学内広報 40 年のあゆみ
- 東京大学創立 130 周年記念
学生企画コンテスト表彰式



2008.1.24

No. 1368

学内教職員の皆様、遅ればせながら、あけましておめでとうございます。本年も学内広報をお引き立てのほど、よろしくお願いいたします。2008年最初の号の巻頭特集は『表紙にみる学内広報40年のあゆみ』です。正月気分などとっくに抜けた時期だとは存じますが、お仕事の合間の息抜きに、ご覧ください。



★東大ふしぎ伝説第1位はオオサンショウウオ

表紙に写真を掲載するようになって長らくの間、それ自体がひとつの記事になるように作られていました。その内容の多くは、季節行事や各部局の研究紹介でしたが、中には、路上散歩などユーモラスな表紙記事もたくさんあります。特に、三四郎池のオオサンショウウオを紹介したこの号（502号・1980年11月10日発行）は出色。記事本文自体が説話調で語られ、「東大ふしぎ伝説」と言っても良い魅力を湛えています。記事によれば……明治時代、三四郎池で捕獲されて医学部の研究材料となったオオサンショウウオが、研究室から逃げ出して再び三四郎池に棲みついたとのこと。そして、三十年以上も三四郎池に隠遁した後、大正時代末期に再捕獲されたと言うのです。写真は、再捕獲されたオオサンショウウオの標本で、総合研究資料館（総合研究博物館の前身）に収められているもの。話の真偽は定かではありませんが、こういう話、信じてみるのもなかなか夢があって良いではありませんか。

★なんとなくベストパフォーマンス賞

この表紙写真（686号・1985年9月17日発行）を発見した瞬間、我々、編集スタッフは「おお！ フナキ！ あるいはハラダ！」と歓声を上げました。まるで大倉山ジャンプ台から飛び立ったスキージャンプ選手のようにではありませんか！

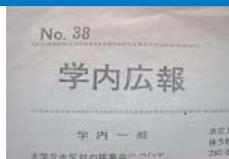
記事自体はスキージャンプとは何ら関係がなく「静止した人間を強風にさらして風の力がどのように働くか」という生産技術研究所の実験の紹介です。学内広報の表紙、数あれど、ヒトがこれほど特異なパフォーマンスを行っている写真は他にはありません。ですから、我々は勝手にベストパフォーマンス賞に認定させていただきました！

体裁の変遷

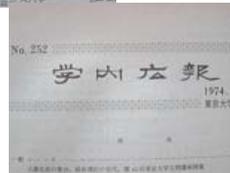
□ 『学内広報』の幼名は、なんと『資料』



学内広報の誕生日は、今を遡ること40年前、1968年10月4日です。当時、本学は「東大紛争」の真っただ中。紛争解決に向けた「教職員間の情報交換用資料」として、このメディアは誕生しました。だから誌名もずばり、『資料』でした。ちなみに、発行元である「弘報委員会」は後に「広報委員会」と字を変え、その後はずっと「広報委員会」として現在に至っています。



□ 38号から『学内広報』に改名



『資料』という風変わりな名前のメディアは、1969年7月14日発行号から『学内広報』という名前に変わります。とは言え、その内容は現在の学内広報のような学内全般のニュースではなく、『資料』とほぼ同じような、紛争解決に向けた情報がメインでした。その後、紛争が終結し、徐々に日常的なニュースが増えていきます。

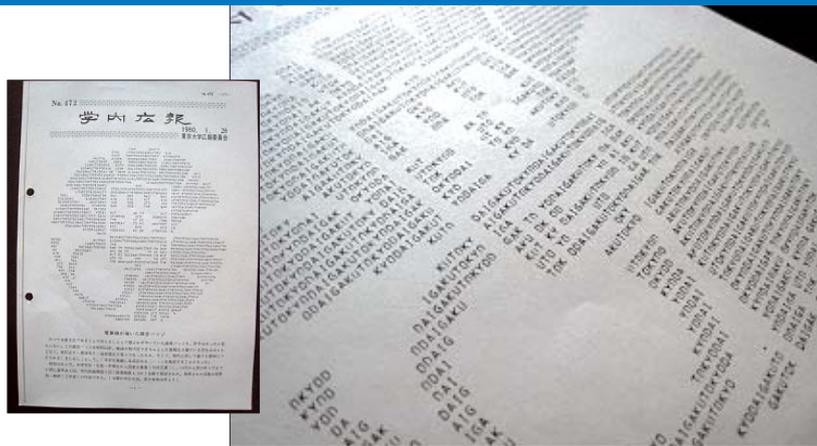
□ 252号から、現在のような題字に

表紙の題字が現在のようなデザインになったのは252号（1974年9月13日発行）から。ではこの筆文字風題字はどなたの作なのでしょう？この問題は学内広報編集スタッフの間でも長らく「謎」とされてきましたが、今回、ついに「答え」を発見しました！252号のあとがきを読むと、「前広報委員長代理・理学部森田先生のスケッチをもとにデザインしたもの」だとのこと。総長あるいは広報委員長が書かれたものではないかと予想していたのですが、やや意表を突いた真相にスタッフ一同びっくりです。



★これぞ、ベストキャプションなり

「五月祭四景」と題された678号（1985年6月3日発行）の表紙です。一見、五月祭の様子を普通に紹介しているように見えるのですが、よくよく見ると、写真に添えられたキャプション（説明文）が秀逸です。変形凧を飛ばそうとしている写真には「飛ばない」、パイ投げ（？）イベントの写真には「ぶつけられる」、ぶん殴りイベントの写真には「殴られる」、掲示板コーナーの写真には「取り持つ」……というキャプションが添えられています。そっけなく、ややネガティブで、なおかつ、脱力感のある秀逸な表現ですね。ごく普通の説明写真がキャプションによって面白い記事に変わる好例です。



★21世紀を予見していた（？）

TOKYODAIGAKUの文字がびっしり！

元祖・アスキーアート登場！

今回の特集のために、バックナンバーをひっくり返していた我々、編集スタッフが一番驚いたのがこの表紙です（472号・1980年1月28日発行）。コンピュータにより「TOKYODAIGAKU」という文字を並べて作られた旧銀杏バッジの絵。いわば、元祖・アスキーアートなのです！記事タイトルは「電算機が描いた銀杏バッジ」。コンピュータではなく電算機と呼んでいるところが時代を感じさせますね。また、絵を構成している文字も、典型的な昔のコンピュータ文字で、なかなか味わい深いです。28年前に作られたアスキーアート。貴重です。

□ 300号から写真付き表紙が定着



初期の学内広報はほとんど表紙に写真が掲載されていませんが、100号記念特集号と200号記念特集号などでは表紙写真が掲載されていました。そして、300号記念特集号以後は毎号、表紙写真が掲載されるようになりました。ここまでは、現在の学内広報のプロトタイプがようやく出来上がった感じになります。

□ 301号から淡青評論スタート！

現在も愛読者の多い淡青評論は、301号（1975年10月27日発行）から始まりました。初期のこのコーナーは、署名原稿ではなく、七徳堂鬼瓦をモチーフにしたタイトルロゴもありませんでした。学内広報は40年目を迎えたわけですが、淡青評論も33年目に突入しているのです。



□ 983号からA4の大きさに

長い間、B5判で制作されていた学内広報ですが、983号（1994年4月18日発行）からA4判になりました。現在と同じ大きさです。

□ 1286号から表紙&裏表紙がカラーに！



1286号（2004年4月1日発行）から表紙と裏表紙がカラーになりました。皆さんもこの体裁はまだご記憶のことと思います。国立大学法人法によって本学が国立大学法人となった時期に合わせて表紙&裏表紙カラー化が行われたわけですね。題字はそのまま継承され、本学の新マークが載せられています。

□ 1327号でリニューアル！

現在の体裁に



1327号（2006年1月11日発行）から現在の体裁になりました。ミイちゃんという犬を表紙写真にしたリニューアル号は皆さんの記憶にも新しいと思います。表紙&裏表紙の体裁変更のみならず、内容も、特集記事の毎号掲載、連載本数の増加等によりマガジン風テイストに変わりました。

いかがでしたでしょうか？ 学内広報の変遷。40年の時を経ても、教職員の手作りで学内広報を発行していくスタイルは不変です。これからも、ご愛読のほど、お願いいたします。

東京大学創立130周年記念学生企画コンテスト表彰式が、12月10日(月)午後6時から山上会館大会議室にて開催され、100人を超える本学学生・教職員等が参加した。

この学生企画コンテストは、学生が本学運営にも積極的に参加し活力あふれるキャンパスの創出に生かすための新たな取り組みとして実施し、50企画の応募があり、厳正な審査の結果、優秀賞3企画及び、アイデア賞・敢闘賞・国際貢献賞各1企画、合計6企画が入賞となった。



記念撮影



総長祝辞



懇談会

【入賞企画】

- 〔優秀賞〕 留学生のための受診支援システム
- 〔優秀賞〕 三四郎池のランドスケープ・リノベーション
- 〔優秀賞〕 東京大学アウトリーチイニシアティブ(UtoI)
- 〔アイデア賞〕 キャンパス内自転車シェアリング
- 〔敢闘賞〕 東大理学部発!「智」の循環プロジェクト
- 〔国際貢献賞〕 東大生国際交流キャンプ

表彰式では、入賞者に対し総長から表彰状等が授与された。引き続き、総長が、この学生企画コンテストは学生を励まし支援する全学的取り組みとして今後も継続したいとの祝辞を述べられた。

表彰状授与後には、入賞者から企画紹介のプレゼンテーションが行われた。

優秀賞企画のプレゼンテーション



留学生のための
受診支援システム



三四郎池の
ランドスケープ・リノベーション



東京大学
アウトリーチイニシアティブ(UtoI)

入 賞 企 画

優秀賞3企画は、学生である企画者自身も参加して、大学からの資金援助により本学の事業として実施することとなっている。

優秀賞 留学生のための受診支援システム

企画者

医学系研究科修士課程1年
沖野富美

審査委員による評価

「留学生のための受診支援システム」は、入念に調査を行った上での提案であることがよく分かる発表だった。この企画は本学で実施する必要性が十分認められ、試行的な取り組みをすぐにも始めるべきものと考え、優秀賞を授与する。

なお、企画の実施にあたっては、本学保健センターとの連携が欠かせない。このことを考慮しつつ、学生企画コンテスト事務局と協議してほしい。また、このシステムは継続的に運営していかなければならず、組織面・予算面からの恒常的な支援が不可欠となると考えられる。

優秀賞 三四郎池のランドスケープ・リノベーション

企画者

農学生命科学研究科修士課程2年	新領域創成科学研究科修士課程1年
土屋一彰	遠藤賢也
新領域創成科学研究科修士課程2年	農学部4年
中山悠	小野田哲郎

審査委員による評価

三四郎池の整備は、知のプロムナード構想(創立130周年記念事業)でも検討の進む全学的課題だが、学生がイニシアティブをとって関係者による検討の場を設けるアイデアは斬新かつ画期的であると判断し、優秀賞を授与する。なお、地域住民が参加するワークショップも検討してほしいが、その前に本学構成員によるワークショップを行いコンセンサスを得る必要がある。

優秀賞 東京大学アウトリーチイニシアティブ(Utol)

企画者

総合文化研究科修士課程2年	理学系研究科修士課程1年
林洋平	加村啓一郎
総合文化研究科修士課程2年	
住田朋久	

審査委員による評価

この企画を実施することによって得られる、教育の普及や社会貢献には未知数の広がり期待できる。また、学生企画コンテスト事業から後方支援を受ければ、より組織的な活動が期待できると考えられる。以上の理由により優秀賞を授与する。

なお、プレゼンターからも指摘されたことだが、企画の実施には本学広報担当部署との連携が必要となる。また、すでに完成の域に達していると思われ取賞の評価を受けた「東大理学部発! 「智」の循環プロジェクト」という企画との連携も考えられてよい。

アイデア賞 キャンパス内自転車シェアリング

企画者

経済学部3年 水野雄介

審査委員による評価

企画を実施するには解決すべき事項が多いが、本学における自転車問題を解決するアイデアとしては検討に値するので、佳作(アイデア賞)を授与する。

敢闘賞 東大理学部発! 「智」の循環プロジェクト

企画者

理学系研究科修士課程3年	理学系研究科修士課程1年
成田 憲保	佐々木 浩
理学系研究科修士課程2年	理学系研究科修士課程3年
小寺 千絵	竹沢 悠典
理学系研究科修士課程1年	理学系研究科修士課程1年
豊田 文典	永村 直佳
理学系研究科修士課程1年	新領域創成科学研究科修士課程2年
池内 桃子	西原 潔
理学系研究科修士課程1年	理学系研究科修士課程3年
岡西 政典	平松 正顕
理学系研究科修士課程2年	工学系研究科修士課程2年
首野 瑛俊	三宅 博行
理学系研究科修士課程2年	理学系研究科准教授
笠原 慧	横山 広美

審査委員による評価

組織的にしっかり運営され、企画内容も完成されている。今後、顕著な活動効果が見込めるため、佳作(敢闘賞)を授与する。

国際貢献賞 東大生国際交流キャンプ

学内留学生と日本人学生の交流促進と国際交流活動リーダー養成のための自然体験合宿

企画者

工学系研究科修士課程2年	工学部3年
速水智章	青木翔平
新領域創成科学研究科修士課程2年	工学系研究科研究員
オググオストルク	チャミンダ デ シルバ
工学系研究科修士課程2年	法学部4年
李 琳瓏	川久保 皆実
工学系研究科修士課程2年	
中川 忠統	

審査委員による評価

応募団体であるHOMEの活動は本学留学生センターからも認知されている。今回提出された企画は、アイデア自体に特筆すべき事項はないが、国際交流を推進する学生主体の取り組みとしては貴重なものであるため、佳作(国際貢献賞)を授与する。

なお、HOMEに対しては、学生企画コンテスト事務局との協議を経る必要があるが、国際交流の場を設営する経費(交通費、宿泊費、飲食費は除く)の一部を資金援助する。

NEWS

一般ニュース



ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構
盛況だったナノ量子情報エレクトロニクスシンポジウム
約 320 名が参加、両日とも満席状態に

ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構はナノ技術、量子科学、ITを融合したナノ量子情報エレクトロニクス研究の最前線を討論する「ナノ量子情報エレクトロニクスシンポジウム」(共催=財団法人光産業技術振興協会、東大グローバルCOE「セキュアライフ・エレクトロニクス」)を10月24日(水)、25日(木)の両日、駒場・数理科学研究科棟大講義室で開催した。機構発足から1年の研究成果のお披露目も兼ね、同シンポには、両日とも会場は満席に近く埋まり、参加登録者数は約320名にのぼった。

シンポジウムは前田正史生産技術研究所長の開会挨拶で幕を開け、岡村定矩理事・副学長の挨拶、文部科学省の行川浩史戦略官の来賓挨拶、荒川泰彦機構長の基調報告などのほか、午後には目玉となった特別セッションで、奥村直樹総合科学技術会議議員が「我が国の科学技術政策とイノベーション創出」、小宮山宏総長が「ものづくり『課題先進国』日本」と題してそれぞれ特別講演を行った。奥村議員は6月に閣議決定されたイノベーション25を踏まえ、「5つの目指すべき社会実現には、自然体では実現しない」と意識的な社会システムの改革を訴えた。小宮山総長は「日本はその時々々の課題に対応して先進性を発揮してきた。これは世界の範となる。そのためにも知の構造化が必要」と訴えられた。続いて東大企業ラボ4社の協働企業責任者によるパネル討論「産学連携への期待」が行われ、会場からは江崎玲於奈先生も登壇して発言するなど、充実した討論となった。

特別セッションの他、2日間に渡り、全教員による講義および若手研究者のポスターセッションで、機構の研

究推進の全貌を明らかにすることができた。いずれも1年間という短期間ながら、研究成果の数々が迫力をもって示されたシンポジウムであった。



基調報告する荒川機構長



特別講演する小宮山総長



ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構
初の「企業集中講義」を実施
大学院生が民間企業で受講

ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構は平成19年度に工学系研究科電子工学専攻および同先端学際工学専攻に開講した「ナノ量子情報エレクトロニクス特論」(「ナノ量子情報エレクトロニクス先端学際工学特論」)の一環として、11月に富士通研究所、NEC、日立製作所3社の研究所において「企業集中講義」を実施した。企業に向いて講義を受ける今回の例は、本学にとっては初の試みで、学生にとっても好評だったようだ。

この特論自体は機構のミッションの1つである「広い視野を持つ学生の育成」を目的に企画され、部局を超え、機構に所属する広範な専門分野の教員約20数名が分担して、それぞれの専門に関して講義を行う横断教育プログラム。この要素として産学連携研究機関でもある本機構の特徴を生かし、6コマ分を3社の企業集中講義に振

り当てられた。「出口を意識しながらサイエンスするセンスも磨く」(荒川泰彦機構長) ことも含め、広い視野を兼ね備えた人材を産学が連携して育成する趣旨で企画されたものである。

企業における講義内容は各社に任され、11月1日(木)に富士通研究所厚木研究所(神奈川県厚木市)からスタート、11月15日(木)にNEC筑波研究所(茨城県つくば市)、11月22日(木)には日立製作所基礎研究所(埼玉県鳩山町)を、受講登録の院生約30人が大挙して訪れ、座学による講義と研究室等の見学を半日かけて行った。

各社ともそれぞれ特徴的な研究設備と研究テーマで研究を進めており、学生の目には、座学よりも研究室の見学が新鮮に映ったようだ。各社の研究者と直接対話できた経験も得難いものだっただろう。討論の場は研究内容から就職ガイダンス、課程コース選択にまで及び、学生にはおおむね好評を博した。集中講義の様子をマスコミが現地取材に訪れるなど、社会的にも注目された。来年度はこの講義を理学系研究科共通講義としても登録することが決まっている。



企業研究所で講義(左から富士通研、NEC、日立)

一般

本部学生支援グループ

第54回総長杯争奪水上運動会が開催される

恒例の運動会行事「総長杯争奪水上運動会」が、12月2日(日)に埼玉県の戸田オリンピックボートコースで開催されました。本大会は、本学関係者によるボートレース大会で、競技経験に関係なく未経験者でも楽しめる総長杯のスポーツイベントとして、またボートレースを体験する数少ない機会として好評を博しています。今年度も天候に恵まれ、学生や教職員ら総勢166名が参加しました。

レースは「ナックルフォア」と呼ばれる4人漕ぎの艇を用い、250mレース2回の合計タイムを競います。艇に乗る「クルー」は、参加者が4人チームで漕ぎ手となり、各チームに漕艇部員がコックス(舵取り)として加わり大会を通じて丁寧に指導します(写真1)。競技ボートは公園ボートと違って脚を主体に体全体を使って漕ぎ、多くの参加者にとっては経験のない動きですが、すぐに上達してどこも迫力あるレース展開を見せました(写真2)。

第54回大会のレガッタの部優勝は、昨年度優勝の「チーム宮下」を抑え「チーム大倉」になりました。メインレースのレガッタの部のほか、陸上でもエルゴメーターというボートのトレーニングマシンを用いたチーム

リレーが行われ、会場には始終歓声が絶えませんでした。エルゴメーターの部においては、昨年同様、留学生の活躍が目立ちました。レース後には会場の東京大学戸田橋艇庫にて懇親会が開かれ、盛会に幕を閉じることができました。



写真1 漕艇部員に指導を受ける参加者



写真2 レガッタレース風景

詳しい大会結果(レガッタの部、エルゴ団体の部、エルゴ個人の部)は以下の通りとなっております。

大会結果

【レガッタの部】 <東京大学総長杯>

順位	チーム名	合計タイム	修正	修正後タイム
優勝	チーム大倉	2分41秒92	なし	2分41秒92
2	比教社	2分19秒22	+24秒	2分43秒22
3	チーム宮下	2分31秒08	+12秒	2分43秒80
4	チーム砂防	2分54秒04	-6秒	2分48秒04
5	タライスト・清水フロンティアズ	3分04秒17	-6秒	2分58秒17
6	混成チーム2	2分34秒92	+24秒	2分58秒92
7	オルですとフナ	2分53秒02	+6秒	2分59秒02
8	混成チーム3	2分48秒83	+12秒	3分00秒83
9	松尾育英会連合	3分00秒90	なし	3分00秒90
10	すう軍隊	2分49秒07	+12秒	3分01秒70

※250mのタイムトライアル2回の合計
 ※順位決定の際、経験者は一人につき+6秒、女性是一人につき-3秒で計算されます

【エルゴの部（団体）】

順位	チーム名	タイム
優勝	Science Student Society Special Squad	2分 35 秒 90
2	チーム宮下	2分 37 秒 20
3	比教社	2分 37 秒 60
4	チーム砂防	2分 41 秒 50
5	Water-striders(Amembo)	2分 45 秒 00

※ 4人チームで男子 200 m、女子 150 m のチームリレー

【エルゴの部（個人）】

順位	名前	距離
優勝	小関 友一、K・S・ムテンダ	171 m
3	本田 賢二、小島 よしき	167 m
5	影澤 博明	164 m

※ 30 秒間の進行距離を競います（自由参加）

本部キャリアサポートグループ
平成 19 年度第 3 回学生窓口業務担当者講習会を開催

12月5日（水）、平成19年度第3回学生窓口業務担当者講習会が開催された。

今回の講習会は、学生の窓口業務を担当する職員を対象に、工学部2号館において「心のバリアフリー化」をメインテーマに講義があり、午後は明治大学（駿河台キャンパス）に場所を移しての見学会となった。

まず、午前中は、本部保全グループ環境整備チーム渡邊福治コーディネーターより「人と人とのセッションから」、バリアフリー支援室より「東京大学におけるバリアフリー支援について」の各講義が行われた。

午後は明治大学（駿河台キャンパス）に協力していただき、リバティタワー、就職・キャリア形成支援事務室、学生相談室など主な学生窓口施設を見学した。参加者19名は熱心に耳を傾けていた。

法人化以降、大学はハンディキャップのある学生や教職員が、可能な限り健常者と同様な条件で活動できる仕組みの実現を目指しており、現在、知的障害者のメンバーによる環境整備チーム、聴覚障害者のメンバーによる自転車整理スタッフ、視覚障害者のメンバーによるヘルスキーパー等々、本学の構成員として活躍されているところである。

知識不足や理解不足による心のバリアを解消し、障害を持つ人と共に協働していく環境を実現するために、私たちひとりひとりが「心のバリアフリー化」を目指さなければならないという趣旨により、日常的に学生との接触が多い窓口業務担当職員に対し、「心のバリアフリー化」の理解を促す機会を本講習会で提供したものである。

なお、本講習会は7月、11月に続き今回で第3回目となる。



保全グループ環境整備チームによる講義風景



バリアフリー支援室による講義風景

本部業務改善グループ
2007 年度業務改善「総長賞」表彰式

12月21日（金）、安田講堂において、2007年度業務改善「総長賞」表彰式が業務改善プロジェクト推進本部の主催で開催された。昨年に引き続き、教職員提案課題及び職員が課題を設定し自ら改善に取り組む自律改善課題の募集を行い、60件の応募があった。

厳正な審査の結果、

- 経費をかけずに、教職員自身のスキル及び一般的なツールを使って取組まれた課題
- 組織横断的なチームで取組まれた課題
- 効果が目に見える課題

が特に高い評価を受け、総長賞（海外研修）1件、総長賞（国内研修）2件、業務改善プロジェクト推進本部長賞2件、経営・企画系統括長賞1件が授与された。

続いて小宮山総長による講話が行われ、「教員、職員、学生の力で世界の知の頂点へ」を目標に、新しい大学モデルを創るため、新たな大学職員のモデルを作るよう力強い言葉での励ましがあった。



総長による講話「東京大学の職員の使命」

また、総長賞受賞者、業務改善プロジェクト推進本部長賞受賞者によるプレゼンテーションも好評のうちに終了し、来年度に向けての取組みが期待される内容となった。

最後に業務改善プロジェクト推進本部長の辰野理事より、今年度の応募課題の特徴として全学展開が可能な取組み課題が多くなったことがあげられ、今後の業務改善を「a little」と「try」をモットーに推進するようにとの講評があった。

なお、当日は550名を超える教職員が参加し、表彰式とともに祝った。

○ 総長賞（海外研修）

「短時間勤務有期雇用教職員の出勤簿に換わる勤務時間管理システムの構築・実施」

先端科学技術研究センター企画調整チーム

○ 総長賞（国内研修）

「旅費システムのFLASH版マニュアル作成による発生源入力への支援」

工学系・情報理工学系等事務部総務グループ
旅費チーム

○ 総長賞（国内研修）

「附属病院における携帯型災害対応マニュアルの作成とE-ラーニングによるマニュアルの実践的学習」

東大病院防災対策ワーキンググループ

○ 業務改善プロジェクト推進本部長賞（自己研鑽費用補助）

「海洋研 HP を活用した各種事務手続きの辞書化：必要な手順の公開と書式のダウンロード」

海洋研事務部の会

○ 業務改善プロジェクト推進本部長賞（自己研鑽費用補助）

「危険予知投稿システムの構築」

医学部附属病院 危険予知対応チーム

○ 経営・企画系統括長賞（コミュニケーションセンター商品）

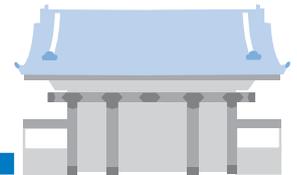
「実験廃液処理システム」

柏地区給与・施設グループ施設管理チーム係長
石川 治夫



総長、辰野理事と受賞者の皆さん

部局 ニュース



大学院総合文化研究科・教養学部

小宮山総長、高校生たちに語る



10月5日（金）17時30分、教養学部18号館ホールで開講された同学部主催「高校生のための金曜特別講座」に小宮山宏総長が登場した。この講座は、高校生たちに大学で展開している学問の面白さを紹介し、進学意欲の向上と進路選択に役立つよう教養学部が平成14年から学期中ほぼ毎週金曜日に開講している公開講座（<http://high-school.c.u-tokyo.ac.jp/>）。今回の講義は129回目にあたる。

当日、駒場会場に集まった高校生、一般人ら152名とともに、インターネットによる双方向同時配信先（全国28高校）の高校生や教員らが受講した。小島憲道教養学部長の開講挨拶と紹介に続き、小宮山総長が現れると高校生たちから大きな拍手が沸き起こった。

この日のテーマは「エネルギーの例で考える学問の意味」。資源の欠乏、環境汚染など、地球的規模の課題について「エネルギー技術」を中心に解説した。自転車のランプ発電から風力、水力、火力、原子力発電や太陽発電のシステム構成上の共通性や相違点を分析しながら「知の構造化」の考え方を展開。高校生たちに地球的規模の課題の解決には膨大な学問領域を包含する新しい思

考方法が必要と指摘し、学問のさらなる重要性を力説した。

講義の後、駒場会場の高校生やインターネットを介して聴講した高校のうち質問校として指定されていた奈良県、岡山県、福岡県、佐賀県、鹿児島県の高校生たちから多数の質問があり、活発な質疑応答が1時間以上にわたり続いた。小宮山総長は質問を受けながら今の高校生たちが日本の将来をやや悲観的にとらえている事に気付き、様々な課題を解決し、環境・エネルギーの分野で世界のフロントランナーである日本の力と位置付けを正しく捉えるとともに、身近な課題から地球的規模の課題まで「知」を構造化して取り組む姿勢を養って欲しいと熱く語った。講座は予定を超過して午後8時近くに終了。その後も総長に質問する高校生たちの列が続いた。聴講した高校生たちには印象深い講座になったと思われる。



高校生を中心にたくさんの来場者が集まった会場



講義終了後も熱心に質疑応答を続ける高校生と小宮山総長

大学院工学系研究科・工学部
(ナノバイオ・インテグレーション研究拠点)
CNBI/CNSI 合同シンポジウムの報告

10月31日(水)～11月2日(金)まで、カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)のCalifornia NanoSystems Institute(CNSI)と本学のナノバイオ・インテグレーション研究拠点(CNBI)による合同シンポジウムが、UCLAにて開催されました。今回の合同シンポジウムは、CNBIとCNSIの連携をより確実なものにし、ナノバイオ分野での研究成果の創出を、よりスピーディーなものにするためにも非常に効果的でした。

10月31日(水)には、UCLAのブロック学長の主催するレセプションが、学長公邸で行われ、その中で本学とUCLA間の学術交流に関する協定書(MOU)が、ブロック学長と小宮山総長により締結されました。ブロック学長は、以前日本に滞在されたこともあり、ご夫妻とも大の親日家でもあります。このレセプションでは、ブロック婦人のお手製の日本料理も振舞われ、和気あいあいとした雰囲気の中で、今後のUCLAと本学のより親密な連携を形作るすばらしいスタートとなりました。

同日午後には、Executive Meetingが開かれ、CNSIとCNBIのリーダーであるProf.Romeと片岡一則教授が、各研究拠点の趣旨について説明を行いました。その後CNSIから、Prof.Wuによるバイオエンジニアグループ、Prof.Houkによるケミストリーグループ、Prof.Kanerによるナノセンサー&バイオエンジニアリンググループのそれぞれの研究グループの紹介があり、CNBIからは、ナノバイオセンシング班について石原一彦教授、ナノマシン班について光石衛教授、セルセラピー班については長棟輝彦教授が各グループの紹介をしました。

11月1日(木)は合同シンポジウムの第一日目、UCLAのブロック学長、本学の小宮山総長の講演で始まり、小宮山総長は、“University of Tokyo’s Approach to Knowledge Structuring and Global Networking”というタイトルで、本学における知の構造とグローバルネットワーク化について語られました。その後ふたつの基調講演をはさみつつ、CNSIとCNBIの研究者による九つの講演が行われました。昼食時には、ポスターセッションが開かれ、若手研究者を中心に国際的な交流と研究に関しての活発な意見交換が行われました。

11月2日(金)には、米国National Institute of Health(NIH)のディレクターであるDr.Mittlemanより、“Public-Private Partnerships & NIH”についての講演と、日本の文部科学省ナノテクノロジー材料開発推進室、ディレクターの高橋雅之氏による“ナノバイオテクノロジーに対する日本政府の政策”についての講演があり、基調講演一件、ポスターセッション、Nic Everett, Chief Scientist, Drug Discovery at Abraxis BioScience Dr. David Martin, CEO of AvidBiotics, 富士通りサーチフェロー藤田省三氏、Dr. Eric Ting, Founder and

Senior Biologics Consultant, Bone Biologics、本学薬学系研究科ファーマコビジネス・イノベーション教室 木村廣道客員教授、Yoshinobu Oga, Manager, Wako Pure Chemical Industries, Ltd. によるパネルディスカッションをはさみながら、各研究拠点リーダーの講演を含む九つの講演が行われました。10月に本学で開催された Swiss-Japan 合同シンポジウムに続き、国際的なナノバイオ分野の活発な研究状況を直に感じることができました。今回締結された本学と UCLA 間の学術交流に関する協定書 (MOU) を契機に、日本と米国のナノバイオ研究の交流が深まり、さらに一層の研究成果が期待されています。尚、CNSI と CNBI の合同シンポジウムは今年秋にも、本学で開催される予定です。



ポスターセッション風景 (伊原正喜客員助教)



調印式後のブロック学長 (UCLA)、小宮山総長、片岡教授 (CNBI リーダー)、Rome 教授 (CNSI リーダー)



握手をするブロック学長 (UCLA) と小宮山総長

生産技術研究所
千葉実験所公開開催される

11月9日(金)に生産技術研究所の千葉実験所公開が開催された。今回も、千葉実験所の特徴である大規模実験設備を中心とした30研究室による24研究テーマの一般公開と特別講演、自主講演、デモンストレーションが行われた。

特別講演では、須田義大教授(千葉実験所長)の「千葉実験所におけるITS、ピークル制御の研究展開」が行われ、多くの鉄道関係者が集まった。講演終了後、国内で初めてのLRT(次世代路面電車)等の鉄道研究用軌道施設のオープン・セレモニーのテープカット、実物の台車の運行のデモンストレーションが行われた。また、それに先駆けて須田教授による記者会見も行われ、デモンストレーションの様子は多数のメディアで取り上げられた。

来賓者数は、昨年とほぼ同数の580人、公開関係者を合わせて750人だった。近隣の小・中学校生を対象とした見学会も定着し、弥生小学校、千葉大附属中学校の生徒が訪れ、迫田章義教授の引率の下に、賑やかに展示場を巡回した。今年は、小・中学生の参加者数が昨年と比べ少なくなったが、その代わりに一般の来賓者が増加した公開となった。また、公開に合わせて生研同窓会パーティーも華やかに開催された。



小学生への説明



来訪者への説明



北見市長より贈呈された感謝状と記念品

東洋文化研究所
東洋文化研究所シンポジウム
「第3回アジア古籍保全講演会」
を開催

11月20日(火)10時から、工学部8号館教授会室において、東洋文化研究所シンポジウム「第3回アジア古籍保全講演会」(創立130周年記念事業)が開催された。この講演会は、学内外に現存する貴重な古籍コレクションの保全対策に取り組む関係者の意識向上とスキルアップを目指し、平成17年度から開催しているものである。関本照夫本研究所長による挨拶に続いて、鈴木董教授(本研究所西アジア研究部門)の講演「後期イスラム世界における紙と書物」では、イスラム世界とその周辺地域について地理的、歴史的な側面それぞれからの解説と、東方から西方への紙の伝播や、当時の筆記用具、書物、アラビア文字の書体等について幅広く説明が行われた。宍倉佐敏氏(女子美術大学大学院非常勤講師)による「東洋の紙の歴史」では、中国における紙の発明の歴史についての考察と、中国での製紙法、材料となる植物繊維について解説が行われた。また、東洋の種々の紙についても、材料となる各地の植物や、それらを使った紙の製法、特徴などが紹介された。

午後の部は、増田勝彦氏(昭和女子大学大学院生活機構研究科教授)の講演「紙資料を修復すること」から始まった。紙資料の修復には芸術的要素を持つ「文化財」を取り扱うという視点が大事であることや、「修復」への考え方が近年では予防措置の必要性ということへ広がっているとの説明があった。また、日本の和紙は伝統的な紙が現在も作られている数少ない例であり、海外でも文化財修復に用いられているとのことであった。

安江明夫氏(国立国会図書館顧問)の「マイクロ資料の劣化-原因と対処」では、マイクロ資料のフィルムベースの変遷についての解説と、国内では1990年代初めまで販売・使用されてきたTACベースフィルムの劣化について、いわゆる「ビネガー・シンドローム」が発生するメカニズムの紹介が行われた。対象となるTACベースフィルムのケアと対策については、状況の概要把握(一

次調査)から、劣化フィルムを個別に調べて以後の対策につなげていく(二次調査)過程について、基本的な考え方の解説があった。

引き続き本研究所図書室から「東洋文化研究所図書室マイクロフィルム状態調査-A-Dストリップを用いて」と題する事例報告が行われ、所蔵するマイクロフィルム管理の現状と、安江氏の考え方に沿って職員が実際に行ったサンプル調査の概要が紹介された。また、調査結果について「TACベースフィルムのうち早急な酸性劣化対策が必要なものが2割以上にのぼることが推定される。この結果を踏まえ今後の劣化対策を検討していきたい」という報告がされた。

休憩をはさみ、池本幸生教授(本研究所汎アジア研究部門)を司会に行われた総合討論では、会場内の参加者から出された質問に対して、各講演者が補足説明やそれぞれの考え方などを交えた活発な意見交換を行った。

学内外の大学や図書館等から集まった合計183名の参加者からは「古籍保全に対する考え方、取り組み、問題点が理解できた」「マイクロフィルム資料の劣化について理論だけでなく、実際の調査の結果を聞くことができ役に立った」「自分の部署でも持ち帰って業務の参考にしたい」などの意見が寄せられた。

最後になったが、講師各位、参加者、またご協力いただいた創立130周年記念事業関係者、会場を提供いただいた工学系研究科関係者各位に、この場を借りて厚くお礼を申し上げる。



講演者による総合討論



講演を聴く参加者

11月23日（金）に大学院農学生命科学研究科附属農場（西東京市）の収穫祭が、西東京アースデイとの共催の形で開催され、約7000名の市民が農場を訪れた。開会のセレモニーでは大杉立農場長、生源寺眞一研究科長、坂口光治西東京市長のほか、西尾茂文理事・副学長にもご挨拶を頂いた。その後、昼にかけて餅つきと芋煮の振る舞いが行われ、長い行列ができていた。

午後には、東京大学創立130周年記念事業として公開セミナー「食をめぐる問題 第4回」を開催し、生源寺研究科長と全国大学附属農場協議会の会長である北里大学の萬田富治先生にご講演を頂いた。同じ会場では、農場の教員や大学院生が進めている研究内容を中心にしたポスターを掲示して、適宜、紹介を行った。

また、本部からの支援を受けて改修した旧乳牛舎（昭和9年建設で、関東大震災後の耐震性を重視した文化財としての価値ある建物）を、この日に農場博物館として開館した。約1700名が訪れ、展示された古い農機具や農場の歴史に関する資料に興味深く眺めていた。今後はボランティアの協力を得て、当面、火曜日と金曜日に開館していく予定である。そのほか、農場の生産物の即売会、農業機械の展示、農業機械の試乗会、ボランティアによる農場見学ツアー、アースデイ関係の展示や販売などがあり、盛りだくさんの内容であった。

なお、プレイベントとして、前日の晩、西東京市役所田無庁舎において附属農場の森田茂紀教授が「イネとバイオエタノール」と題して講演を行ったが、約70名の参加があり、活発に質疑応答が交わされた。



当日、オープンした農場博物館の内部と見学者



トラクターの試乗会に参加した親子連れ



同時開催した農場公開セミナーの会場と参加者

11月29日（木）13時20分から平成19年度海洋研究所防災訓練が海洋研究所中野キャンパスにおいて、気温11度、肌寒い北東の風の中、教職員、院生等約190名が参加し実施された。

本所では11月初旬にAED（自動体外式除細動器）が配置されたばかりであり、今回の訓練では使い方を知らない参加者が殆どであった。消防署による使用説明と注意事項を聞いた後、教職員や学生から、パッドの位置の再確認があり、身体が濡れている場合にはどうしたらよいのか、小学生のような小さな身体にも同じように使ってよいのか、AED到着前に行う心肺蘇生法改正後の胸骨圧迫の回数の確認等、真剣で具体的な質問が次々と出され、いざという場合には自分が役に立たねば、という全員の意識の高さが窺えた。

実施にあたってはまず地震によりB棟1階（講堂準備室）での出火を想定し、同階の第一発見者が「火事だー」と大声で周囲に知らせることから始まり、初期消火、避難訓練を行った。同時に垂直式救助袋によりA棟3階の教職員が避難を行い避難器具取扱いの取得及び体験を行った。その後、中野消防署の指導のもとに海洋研究所自衛消防隊による屋内消火栓放水訓練、消火器取扱い訓

練を行った。続いて訓練の場所を講堂に移し、包帯法及びAEDを使用した応急救護訓練が実施された。

最後の消防署による講評でも、非常に熱心に取り組んでいたとお褒めの言葉をいただくことができ、訓練の重要性を再確認した有意義な体験であった。

海洋研では今回の経験を来年度の訓練に繋げ、さらに充実した訓練を行う所存である。



放水訓練を行う参加者



消防署指導員からAED（自動体外式除細動器）の説明を熱心に聞く教職員等

物性研究所

部局

物性研創立50周年記念イベント、開催される

物性研究所が本年度で創立50周年を迎えることを記念して、11月29日（木）と30日（金）に記念シンポジウムや記念式典等が開催された。29日（木）には物性研究所大講義室（柏キャンパス）において、記念シンポジウム「強相関電子系の新展開」が開催され、強相関電子系研究の第一線でご活躍の13人の講師による講演と活発な議論が行われた。本シンポジウムには200名を超える参加者があった。30日（金）には、東京六本木の政策研究大学院大学想海楼ホールにおいて、午前中に記念シンポジウム「物性研究所－過去・現在・未来－」、午後にはパネルディスカッション「これから50年の科学は？」とそれに続いて50周年記念式典が開催された。



記念式典で挨拶する小宮山宏総長



記念式典で祝辞を述べる藤木完治文科省大臣官房審議官

午前のシンポジウム「物性研究所－過去・現在・未来－」では、約250名の聴衆を迎え、物性研究所からの「物性研究所の歴史と現状および将来計画」についての講演の後、所外からの3人の講師による「物性研究所に望む」と題しての講演があった。

午後のパネルディスカッション「これから50年の科学は？」では、パネリストとして小宮山宏（本学総長）、佐倉統（本学大学院情報学環教授）、吉田博（大阪大学産業科学研究所教授）、北澤宏一（独立行政法人科学技術振興機構理事長）、中村桂子（JT生命誌研究館長）、茂木健一郎（ソニーコンピュータサイエンス研究所上級研究員）の6氏と司会進行の柴山充弘本研究所教授による「これから50年の科学は？」について色々な視点からの活発な討論が行われた。このパネルディスカッションは約380名におよぶ参加者があり会場に入りきれないため、政策研究大学院大学食堂でテレビ中継された。なお、この模様はテレビ収録が行われ、1月13日（日）にNHKBSフォーラムで放送された。

パネルディスカッション終了後に引き続いて、約250名の参加者ととともに50周年記念式典が挙行された。上田和夫本研究所長による式辞、小宮山宏総長による挨拶に続いて日本学士院前院長長倉三郎氏、文部科学省大臣官房審議官研究振興局担当藤木完治氏、日本学術会議物理学委員会委員長永官正治氏、京都大学基礎物理学研究所長江口徹氏から祝辞をいただいた。

夕方には50周年記念パーティが行われ、物性研究所のOB・OG、共同利用機関関係者を中心とした250名

を超える出席者でにぎわった。上田和夫本研究所長による挨拶、鈴木洋一郎柏キャンパス共同学術経営委員会委員長（宇宙線研究所長）による祝辞、岡村定矩理事・副学長による乾杯に続いてOBや関係者からの祝辞をいただき、また祝電なども披露され、和やかで楽しい時間を過ごすことができた。



パネルディスカッション「これから50年の科学は？」

大学院人文社会系研究科・文学部

外国人留学生見学旅行を実施

部局

11月29日（木）・30日（金）の両日、「雪国、開港場新潟、おいしいお米」のキーワードのもと、恒例の外国人留学生見学旅行を実施した。参加者は、留学生38人、引率の教職員10人の合計48人。

8時過ぎに本郷構内からバスで出発し、車中から遅い紅葉を楽しみ、関越トンネルを抜けたところで念願の雪景色に遭遇し大歓声があがった。越後三山を眺めながらバスに揺られて約4時間、ようやく到着した魚沼市にある道の駅でコシヒカリたっぷりの郷土料理を満喫した後、長岡市にある『新潟県立歴史博物館』に移動し、新潟県の歴史、縄文文化、米づくり、雪とくらしなどの展示を見学した。

さらに弥彦に移動。『弥彦神社』参拝後は、弥彦温泉の宿に到着し、夕食を兼ねた懇親会を行った。和やかな雰囲気の中、ゲームや母国の民謡等で盛り上がり、参加者相互の親睦を深め、楽しい時を過ごした。

翌日はコートがいらないほどの暖かな晴天に恵まれ、信濃川河口近くの旧新潟税関庁舎、旧第四銀行など歴史的建物が集う『新潟市歴史博物館みなとびあ』を見学した。

昼食後、田園風景を眺めながら、最後の見学地である『北方文化博物館（豪農の館）』に移動。越後随一の大地主となった伊藤家の敷地内を見学し、15時過ぎに帰路についた。

バスは予定時刻より若干遅く19時40分頃に本郷構内に到着。こうして今年の見学旅行は、日本の地方都市の歴史と文化、美しい自然を実感しながら、留学生同士の触れ合いなど、参加者に多くの思い出を残し無事終了した。



北方文化博物館（豪農の館）にて笑顔で記念撮影



新潟県立歴史博物館にて展示物を熱心に見入る様子

東京大学 21 世紀 COE プログラム「機械システム・イノベーション」

部局

総括シンポジウム—機械工学が拓く未来技術を極め、人を育てる— 開催される

平成15年度にスタートした21世紀COEプログラム「機械システム・イノベーション」の総括シンポジウムが11月30日（金）に工学部8号館教授会室において開催された。シンポジウムでは小宮山宏総長の挨拶、笠木伸英拠点リーダーの拠点事業概要説明に引き続き、本拠点のプロジェクト研究および人材育成活動の成果についての報告講演があり、人材育成・産学連携に関するパネルディスカッションも催された。シンポジウムの参加者は、学内外の大学、企業の方々等合わせて217名に達し、シンポジウムの後の懇親会終了時まで活発な議論が行われた。



小宮山総長の挨拶



会場の様子



粉末消火器を使った消火訓練

大学院農学生命科学研究科・農学部

自衛消防訓練を実施



11月30日（金）12時15分から約1時間にわたり、農学部1号館、2号館、2号館別館及び農学部グラウンドにおいて、平成19年度自衛消防訓練が本郷消防署の協力を得て実施された。

訓練は、各建物の各フロア計9ヶ所から火災が同時に発生したとの想定で、火災報知器の発報、消防署等への通報等の初期消火訓練の後、各研究室からの避難誘導及び避難後の人員確認といった避難訓練では、実際に各フロアの防火戸を閉め、部屋に逃げ遅れた者がいないか確認しながら避難する等、実際に即した訓練に努めた。

その後、農学部グラウンドに移動し、消火器を使用しての消火訓練を行った。今回は、本研究科の要望により、普段の訓練に使用する水消火器ではなく、本当の火災に使用する粉末消火器で行ったが、その消火力や粉末の多さに参加者から感嘆の声が上がり、消火器取扱いの大切さを実感できた。

最後に本郷消防署より講評をいただき、生源寺研究科長より日頃からの防災・防火への意識の徹底をお願いして約240名が参加した訓練は無事終了した。

今回の消防訓練は、連絡体制の不備や避難する時の人員確認等の問題が確認でき、得る所が多く、今後の教訓として非常に有意義なものとなった。



避難訓練で人員確認をする農学部2号館の参加者

医学部附属病院

「附属病院 外来棟での防災訓練」、実施される



12月7日（金）16時から、「附属病院 外来棟での防災訓練」が、約60名の教職員や約10名のボランティアが参加して実施された。

今回の訓練計画は、外来棟では過去一度も防災訓練をおこなっていないこともあり、10月より全国で緊急地震速報の運用がスタートしたことに関連した訓練も盛り込み、過去の取組み事例がまったくなくゼロからの手探りの状態ではあったが、机上訓練を繰り返し行い、何とか立案し実施された。

想定としては、東京湾付近でM7直下型地震が発生、震度6強の激震が約10秒後に東大病院を襲うケースを想定し、緊急地震速報一斉警告音を鳴らすところから始まった。

警告音鳴動後、直ちに自分の身の安全確認をし、患者様へは警戒姿勢をとるように指示をした。

揺れが収まると一旦職員は全員外待合へ集合し、リーダーの指示の下、役割分担と役割内容の指示を受けた。

同時に外来患者様へは落ち着いてそこに留まるように指示をおこない、人と物の被災状況をチェックして回った。その中には転んで怪我を負い、その場でうずくまる職員・患者様を発見し、トリアージ後処置室に搬送し処置をおこなうという場面もあった。その後、建物倒壊の恐れありとの判断で全員避難をおこない、全員避難確認後終了となった。

災害拠点病院に指定されている附属病院は、地域の医療救護活動の重要な拠点となることが期待されている。外からの傷病者受入をする前には、まず院内の外来患者様を適切に処置・避難させることが必須である。

今回の防災訓練で浮き彫りとなった問題点・反省点を踏まえ、今後導入予定の緊急地震速報への対応や、一層の防災意識の高揚を図ることとしている。

※ トリアージ (triage)

医療機能が制約される中で、一人でも多くの傷病者に対して最善の治療を行うため、傷病者の緊急度や重症度によって治療や後方搬送の優先順位を決めること



緊急地震速報一斉警告者への対応



患者様の避難誘導

大学院総合文化研究科・教養学部

「三鷹市民と三鷹国際学生宿舎生との集い」開催される

12月8日（土）11時から、三鷹国際学生宿舎（三鷹市新川6-22-20）において、三鷹市の後援をいただき「三鷹市民と三鷹国際学生宿舎生との集い」が開催された。この集いは、宿舎に居住する宿舎生、とりわけ約3割を占めている留学生と地域住民との交流を目的として毎年開催しているものであり、平成6年に第1回を開催して以来、今回で14回目となる。

集いは二部構成となっており、開始にあたって小島憲道大学院総合文化研究科長及び城所吉次三鷹市企画部長（三鷹市長代理）からの挨拶の後、第一部として佐藤安信大学院総合文化研究科教授（前三鷹国際学生宿舎運営委員会委員長）による「持続可能な平和の構築」と題した講演が行われた。UNTAC（国連カンボジア暫定統治機構）人権担当官として赴いたカンボジアでの体験を踏まえ、2004年4月から大学院総合文化研究科で行われている「人間の安全保障」プログラムにおいて教育指導を行っている内容を平易に説明した内容で、集まった約100名の三鷹市民等は熱心に聴講していた。

13時過ぎからは第二部として、懇親パーティーが行われた。西中村浩大学院総合文化研究科副研究科長の挨拶に続き、宿舎生を代表して、横井一樹三鷹国際学生宿舎院生会幹事長の乾杯の発声によりパーティーが開始された。パーティーの中では留学生参加企画が二つあり、まず留学生に日本の印象、三鷹

に住んでの感想等を司会者によるインタビュー形式で話してもらう企画が行われた。「日本では旅先でも日本語がそれほどできない留学生に対して親切だった」、「政治的なニュースでしか知ることのできなかった日本のイメージが、留学を通して大きく変わった」等の実感のこもった感想が聞かれたほか、主催者側が予定していた人数よりもはるかに多くの留学生が演台に出てきて挨拶するなど、想像以上の盛り上がりを見せた。

引き続きインドネシアからの留学生であるラフマツト・サントソ・スラディンさん（総合文化研究科研究生）がバリ民族舞踊を披露した。きらびやかな民族衣装を身に纏い、独特の音楽に合わせてのラフマツトさんの舞いに、会場に居合わせた人々は一様に魅了されていた。

パーティーは三鷹市民、三鷹国際交流協会会員、三鷹クラブ（旧三鷹寮OBの会）会員等に宿舎生も加わり約170名の参加者を得て、会場の共用棟ホール一杯に和やかな交流の和が広がっていた。

干場革治三鷹クラブ世話役、鈴木悠平宿舎生会宿舎委員からの挨拶の後、太田邦史三鷹国際学生宿舎運営委員会委員長からの閉会の挨拶をもって、15時に集いは盛会のうちに終了した。なお、この催しは「武蔵野三鷹ケーブルテレビ」において、地域ニュースを扱う番組「デイリー武蔵野・三鷹」の中で、12月11日（火）に内容の一部が放送された。



佐藤安信総合文化研究科教授の講演



留学生へのインタビュー企画



ラフマットさんによるバリ民族舞踊の演舞

大学院教育学研究科・教育学部

伝統芸能鑑賞教室「雅楽」を楽しむ

部局

12月12日(水)、教育学研究科では、教職員と留学生、チューターが集い、雅楽を鑑賞するひとときを持った。晩秋に、伝統芸能教室と称して能楽や人形浄瑠璃を鑑賞し留学生との文化交流を楽しむことが恒例となったこの行事であるが、今年は、瑞穂雅楽會(みずほがかくかい)のご協力を得て、本格的な日本古来の音楽と舞を堪能した。

本郷キャンパスにある懐徳館を舞台にお借りすることができたことで、当日、初めて館内に足を踏み入れたという参加者が少なくなかった。好天にも恵まれ、銀杏の葉が午後の日差しを浴びてきらきらと舞散るなか、幻想的な笙の調べに耳を澄ませた。留学生はもとより、日本人にとっても忘れがたい半日となった。



瑞穂雅楽會による管弦



管弦演奏に魅入る留学生たち



舞楽の指導に参加する今井教授と留学生

大学院農学生命科学研究科・農学部

吉川牧場長が山口笠間市長を表敬訪問

部局

12月21日(金)吉川牧場長は、眞鍋教授とともに笠間市役所を訪れた。牧場では、11月3日(土)に牧場公開デーを行い、その際笠間市から多くのご協力を得て成功裡に終わったもので、その御礼方々ご報告を兼ね山口笠間市長を表敬訪問した。

対談では、吉川牧場長が皮切りに牧場公開デーの協力に対して御礼を述べた後、食の安全やBSE牛に関する問題への取組み、また、当牧場が持つ研究や教育シーズ、高度な専門知識及び技術をはじめとし、市民の交流の場としても、地域との活性化に如何に協力できるのか意見交換を行った。



左から山口市長、吉川牧場長、眞鍋教授(於:笠間市長室)

牧場公開デーを開催するにあたり、笠間市役所では、市報への掲載をはじめ、市職員への万遍ないPRや地元新聞社へのイベント情報の提供、ポスターの配布など市役所挙げての活動を行って頂いた。

牧場公開デー当日は、昨年同様に、写生大会や動物ふれあい広場、市民公開セミナー、朝搾りたてのミルクの試飲など多くのイベントを企画した。今年は、山口笠間市長が参加された他に市職員も加わって、パンフレットの配布をはじめとし、落花生の生茹でや油で炒ったものの試食コーナー、地元産のサツマイモやサトイモの無料配布など盛沢山のイベントに汗を流して頂いた。事前のPRも功を奏したのか例年にない活況を呈した。

最後に、牧場ならではの話題を二つ。

一つ目は、11月21日（水）に、岩間消防署署員の立会のもと、消防訓練を実施した。今回は、現場から特に要望が出たもので、厩舎を中心に訓練を実施した。

牧場には、厩舎が3ヶ所あり、サラブレッド種とクリオージョ種併せて20頭を飼養管理しているが、そのうちの一つ分娩厩舎でガスコンロを使用中に乾草に引火し、建物が火災になったというもの。人ならぬ馬房にいた馬にとっては突然の災難。避難経路の確保とともに放牧地への誘導を行った。普段の訓練にはない緊張感があったが、果たして馬にとっては訓練になったのかどうか。



放牧場へ避難誘導させる技術職員

その後、初期消火訓練をはじめとし、牧場にはAEDは設置されてないが、その取扱方法や人形を使用しての心肺蘇生法をご指導頂いた。

二つ目は、動物慰霊祭が12月21日（金）にしめやかに執り行われた。牧場正門入り口から左に入ると、昭和56年12月に設置された「動物慰霊之碑」と刻まれた大きな石がある。例年この場所において、牧場内で実験・研究用として供された動物の霊に感謝と追悼の意を表し、教職員・学生等参列者による焼香を行っている。

学内広報月刊化のお知らせ

学内広報は月に1回のペースで発行されることになりました。

月刊化にともない、EVENT LISTはなくなりました。今後はホームページ・ポータルサイトをご活用ください。

今後、INFORMATION記事ご寄稿の際には、記事上の開催日・×切等が当該号配布日以降であることをご確認のうえ、お送りください。また、即時性を要求されるINFORMATION記事に関しましては、ホームページ・ポータルサイトをご活用ください。

2007年度今後の学内広報発行スケジュール

号数	原稿締切日 (原則第1月曜日)	発行日	配付日
1369	2月4日 (月)	2月18日 (月)	2月22日 (金)
1370	セクシュアル・ハラスメント アンケート結果 特集号(予定)		
1371	3月3日 (月)	3月14日 (金)	3月21日 (金)

学内広報にご寄稿の際は、以下のURLにある「記事提出要領」をご参照ください。

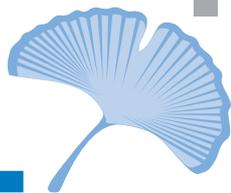
http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html

【東京大学ホームページ】→
【右下の学内広報アイコンをクリック】

問い合わせ先・原稿提出先:
本部広報グループ 広報企画チーム
TEL:03-3811-3393 内線22031
E-mail:kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



キャンパス ニュース



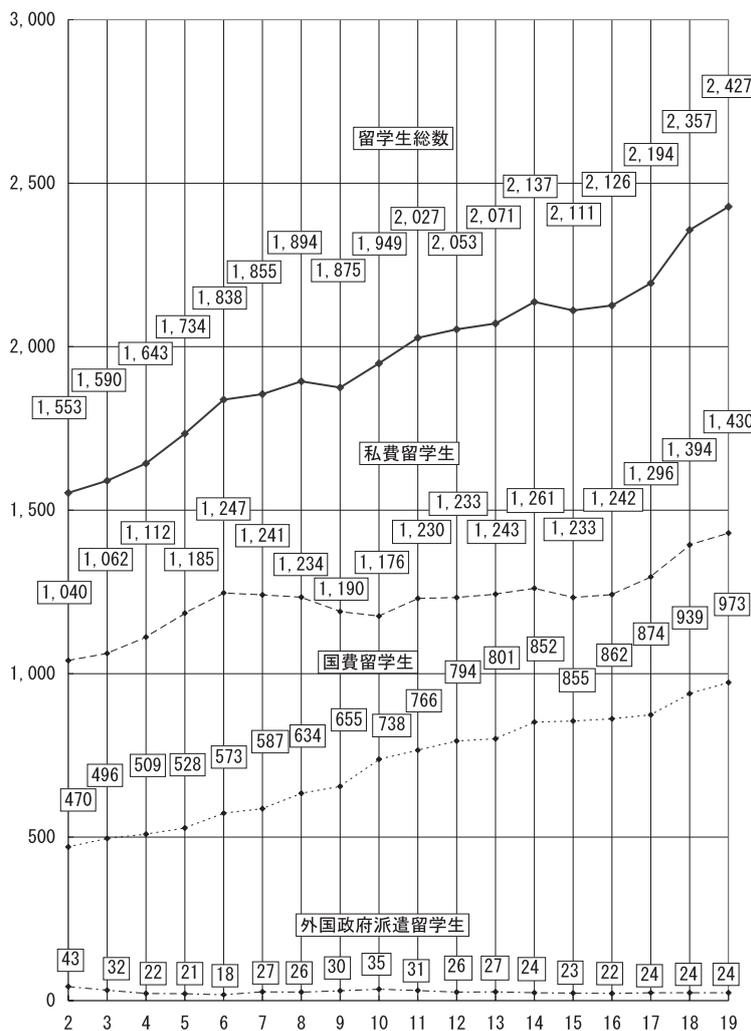
本部留学生支援グループ

平成 19 年度外国人留学生数－国費外国人留学生数 973 人、私費外国人留学生数 1,430 人、外国政府派遣留学生数 24 人、在日外国人留学生数 198 人－

本学では、毎年 5 月と 11 月の年 2 回、同月 1 日現在の外国人留学生数を調査している。これをもとに各年度 11 月 1 日現在の外国人留学生数の推移を示した。また、本年 11 月 1 日現在の外国人留学生数は以下のとおりである。

東京大学外国人留学生受入数の推移
(各年度 11 月 1 日現在)

本部留学生支援グループ調



全学生数に対する外国人留学生数の比率

事 項	A 全学生数 (人)	B 日本人学生数 (人)	C 外国人留学生 (人)	C/A 比 率
学部レベル	14,250	13,896	267	1.87%
大学院レベル	14,118	11,885	2,160	15.30%
計	28,368	25,781	2,427	8.56%

※全学生数欄には在日外国人学生を含む。
 ※研究所に所属する外国人研究生は、大学院レベルに含む。
 ※比率欄の数は四捨五入。

平成 19 年度 外国人学生数

平成 19 年 11 月 1 日現在

区 分	学 部				大 学 院								研 究 所		合 計			
	学 生		研 究 生 等		修 士 課 程		専 門 職 学 位 課 程		博 士 課 程		外 国 人 研 究 生 等		大 学 院 研 究 生		研 究 所 研 究 生		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
国 費(a)	73	41	0	0	138	94	3	2	270	143	126	81	0	0	2	0	612	361
	114		0		232		5		413		207		0		2		973	
外国政府派遣	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0
	1		0		1		0		0		0		0		0		2	
外国政府派遣	5	3	0	0	3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	8	4
	8		0		3		0		0		1		0		0		12	
外国政府派遣	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	1		0		0		0		1		0		0		0		2	
外国政府派遣	8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0
	8		0		0		0		0		0		0		0		8	
計(b)	14	4	0	0	4	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	19	5
	18		0		4		0		1		1		0		0		24	
私 費(c)	43	42	18	17	218	195	7	6	329	250	123	115	9	4	4	2	751	631
	85		35		413		13		579		238		13		6		1,382	
小 計(d)((a)+(b)+(c)) (在留資格「留学」の者)	130	87	18	17	360	289	10	8	600	393	249	197	9	4	6	2	1,382	997
	217		35		649		18		993		446		13		8		2,379	
私 費(e) (在留資格「留学」以外の者)	11	4	0	0	2	3	1	1	7	4	6	7	0	0	2	0	29	19
	15		0		5		2		11		13		0		2		48	
外国人留学生合計(f) ((d)+(e))	141	91	18	17	362	292	11	9	607	397	255	204	9	4	8	2	1,411	1,016
	232		35		654		20		1,004		459		13		10		2,427	
在日外国人学生(g)	97	15	0	0	26	12	5	0	22	15	3	3	0	0	0	0	153	45
	112		0		38		5		37		6		0		0		198	
外国人学生 総計 (f+g)	238	106	18	17	388	304	16	9	629	412	258	207	9	4	8	2	1,564	1,061
	344		35		692		25		1,041		465		13		10		2,625	

学部及び研究科等別外国人留学生数

平成 19 年 11 月 1 日現在

区 分	学 部				大 学 院								研 究 所		小 計		合 計		
	学 生		研 究 生 等		修 士 課 程		専 門 職 学 位 課 程		博 士 課 程		外 国 人 研 究 生 等		大 学 院 研 究 生		研 究 所 研 究 生				
	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費	国 費	私 費			
学 部	法学部	5	8														5	8	13
	医学部																0	0	0
	工学部	24	22		5												24	27	51
	文学部	9	2														9	2	11
	理学部	7	6														7	6	13
	農学部	1	3		5												1	8	9
	経済学部	5	9														5	9	14
	教養学部	61	65		25												61	90	151
	教育学部	2															2	0	2
	薬学部		3														0	3	3
	小計	114	118	0	35												114	153	267
大 学 院	人文社会系研究科				10	24			14	57	30	31		1			54	113	167
	教育学研究科					14			5	24	7	17		1			12	56	68
	法学政治学研究科				8	21		2	13	20	11	12					32	55	87
	経済学研究科				7	12			1	5	1	2					9	19	28
	総合文化研究科				30	22			31	96	33	37		1			94	156	250
	理学系研究科				5	6			17	13	6	3					28	22	50
	工学系研究科				77	177			171	165	34	69		4			282	415	697
	農学生命科学研究科				9	22			62	55	21	20		5			92	102	194
	医学系研究科				4	28	2	2	25	72	13	16					44	118	162
	薬学系研究科				2	2			5	6	4	3					11	11	22
	数理学系研究科				5	3			9	1	2						16	4	20
	新領域創成科学研究科				27	47			31	37	7	12					65	96	161
	情報理工学系研究科				36	28			21	29	19	7					76	64	140
	学際情報学府				12	16			8	11	19	23					39	50	89
公共政策学教育部						3	11				1					3	12	15	
小計				232	422	5	15	413	591	207	253	0	12			857	1,293	2,150	
研 究 所	医科学研究所														3		3	3	
	地震研究所														1		1	1	
	生産技術研究所													3		3	3		
	分子細胞生物学研究所																	0	
	物性研究所																	0	
	海洋研究所													2	1	2	1	3	
	先端科学技術研究センター																	0	
小計													2	8	2	8	10		
合計	114	118	0	35	232	422	5	15	413	591	207	253	0	12	2	8	973	1,454	2,427

(注)①外国政府派遣留学生は、私費の欄に含む。

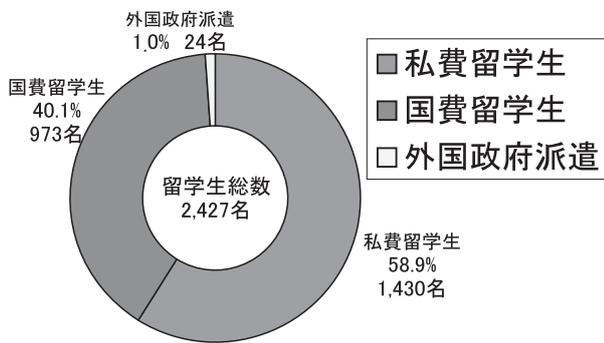
国又は地域別外国人留学生数

平成 19 年 11 月 1 日現在

国名又は地域名	国 費							私 費							合 計						総計
	学部			大学院等				学部			大学院等				学部			大学院等			
	学生	研究生等	修士	専門職	博士	研究生等	小計	学生	研究生等	修士	専門職	博士	研究生等	小計	学生	研究生等	修士	専門職	博士	研究生等	
デンマーク					1		1						3	3					1	3	4
イギリス			3		3	4	10			1		1		2			4		4	4	12
ベルギー					1		1						3	3					1	3	4
ルクセンブルク					1		1							0					1	1	1
オランダ					4		4					2		2					6	2	6
ドイツ			1		7	5	13		2	1		1	15	19		2			8	20	32
フランス			7		9	7	23		2	1		8	9	20		2		8	17	16	43
スペイン			3			1	4					3		3			3		3	1	7
ポルトガル			2		1	3	6					2		2			2		1	5	8
イタリア			1		3	3	7		1			1	4	6		1		4	7	13	
ギリシャ			2		1		3							0			2		1		3
オーストリア					4	1	5						2	2				4	3	7	
スイス					3	1	4		1			2	5	8		1		5	6	12	
ポーランド			1		3	2	6			1			1	2		2		3	3	8	
チェコ					3	1	4							0				3	1	4	
ハンガリー	2		3		2	2	9					1		1	2		3	3	2	10	
セルビア・モンテネグロ					1	1	2			1				1			1	1	1	3	
ルーマニア	2				4	1	7					2		2	2		6	1	9		
ブルガリア	3		3		1	3	10					1		1	3		2	3	11		
アルバニア							0			1				1					1		
ロシア	2		5		3	3	13					5		5	2		5	8	3	18	
リトアニア						1	1							0					1	1	
スロバキア			1			1	2							0			1		1	2	
ウクライナ			1				1							0			1		1	1	
ウズベキスタン							0					1	1	2				1	1	2	
カザフスタン	2						2							0	2					2	
ベラルーシ	1		1				2							0	1		1		2		
クロアチア					1		1					1		1				1	1	2	
スロベニア					1		1							0				1	1	1	
ボスニア・ヘルツェゴビナ					1		1							0				1	1	1	
キルギス			1				1							0					1	1	
アゼルバイジャン							0			1				1					1	1	
タジキスタン					1	1	2							0				1	1	2	
小計	14	0	35	0	60	43	152	0	8	7	0	29	54	98	14	8	42	0	89	97	250
合計	114	0	232	5	413	209	973	118	35	422	15	591	273	1,454	232	35	654	20	1,004	482	2,427

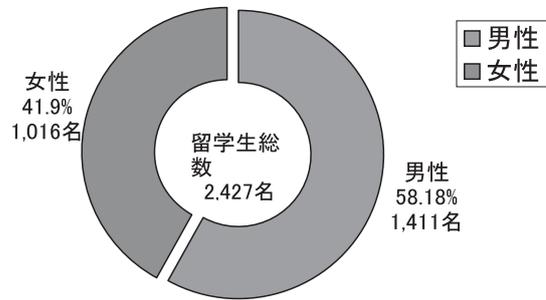
平成 19 年度外国人留学生種別内訳

平成 19 年 11 月 1 日現在



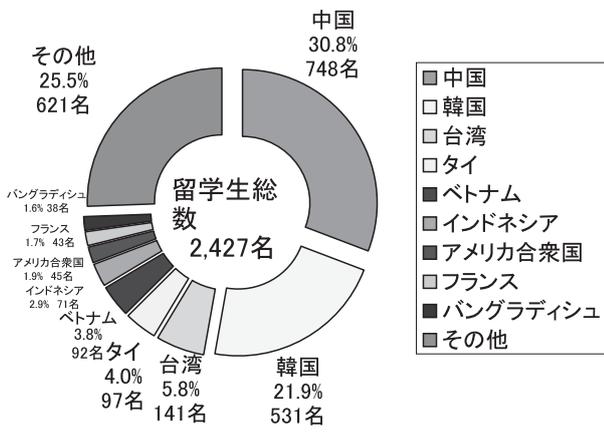
平成 19 年度外国人留学生男女別内訳

平成 19 年 11 月 1 日現在



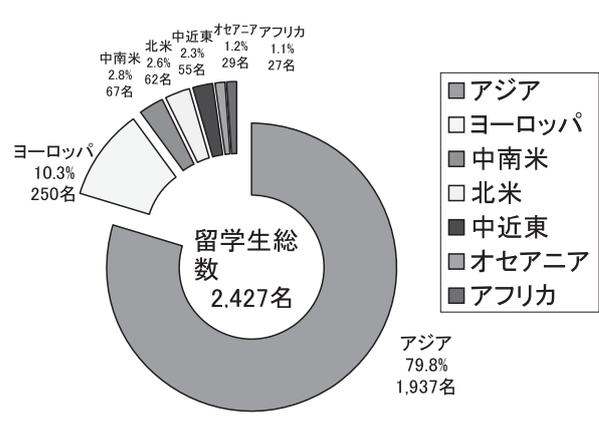
平成 19 年度外国人留学生国籍別内訳

平成 19 年 11 月 1 日現在



平成 19 年度外国人留学生地域別内訳

平成 19 年 11 月 1 日現在



平成19年度大学知的財産本部整備事業 関東地区大学 知的財産戦略研修会 「東京大学における産学連携の成果と課題」を丸ビルホールで開催

全国からの事前申し込みは定員300名を超える

12月3日(月)10時より丸ビルホール(丸ビル7階)にて、本年度を含めた過去5年間の大学知的財産本部整備事業の一環として、標記講演会が開催されました。山田興一(本学 理事)と、田口 康氏(文部科学省 研究振興局 研究環境・産業連携課長)からの挨拶の後、講演とパネルディスカッションが行われました。

藤田隆史(本学 産学連携本部長/教授)による本学産学連携体制と成果の総括、太田与洋(本学 産学連携本部 産学連携研究推進部長/教授)のProprius21(価値創造型産学連携)の試行と成果について、産学連携研究推進部2名より、ソフトウェアの技術移転の課題、サービス・イノベーション研究会の活動報告があり、続いて、小蒲哲夫(本学 産学連携本部 知的財産部長/教授)より、発明届処理の現状と課題、知財部2名より知的財産に関する学内規制の整備と課題、研究契約における実務と考え方について発表があり、企業の方から産学連携への期待や、大学の知的財産に携わる人々からの質問が多く出されました。

その後、本学における起業・大学発ベンチャー支援をテーマに、各務茂夫(本学 産学連携本部 産学連携事業化推進部長/教授)がモデレータをつとめ、パネルディスカッションが行われました。パネリストは、山本貴史氏(株東京大学TLO代表取締役社長)、郷治友孝氏(株東京大学エッジキャピタル代表取締役社長)、伊藤耕三(新領域創成科学研究科教授/アドバンスト・ソフトマテリアルズ(株)取締役)、平賀督基氏(株モルフォ代表取締役社長)の4名。議題には、シーズの掘り起こしをどうするのか? 大学発ベンチャー支援のための人材育成をどうするのか? などがあがりました。

丸ビル内ホワイエで18時より開催された交流会でも、名刺と情報の交換が続きました。総合司会は門田淳子(本学 産学連携コーディネーター)。



挨拶をする田口 康氏(文部科学省研究振興局 研究環境・産業連携課長)(左上)、丸ビルホールで聴講する参加者(右上)、パネルディスカッションの様子(中央)、丸ビル内ホワイエで開催された交流会の様子(下)。

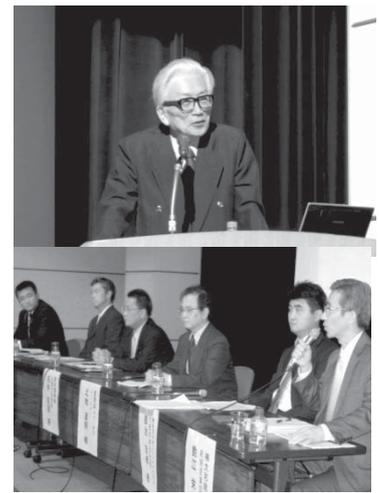
東京証券取引所との共催セミナーを東証ホールで開催

170名を超える大学発ベンチャー関係者が参集、盛況に終わる

12月6日(木)14時より東証ホール(日本橋兜町)にて、本学産学連携本部&東京証券取引所共催セミナー「大学発ベンチャーの成長とIPO実現に向けて」が開催されました。このセミナーは、2006年7月から開始された産学連携本部と東京証券取引所との共同研究の経過報告会として位置付けられています。

藤田隆史(本学 産学連携本部長/教授)と、静 正樹氏(株東京証券取引所執行役員)の挨拶に引き続き、第1部では、「イノベーションと大学の役割」を演題に、今井賢一氏(スタンフォード大学名誉シニアフェロー/一橋大学名誉教授)から基調講演がありました。講演では米国主要大学におけるイノベーション創出の分析を踏まえ、大学の知を事業化するための基本要件について課題提起がなされました。第2部のパネルディスカッションでは、「IPOに向けた大学発ベンチャーの可能性と課題」をテーマに議論を行いました。パネリストは、鈴江栄二氏(株大和総研参与 新規産業調査本部長)、郷治友孝氏(株東京大学エッジキャピタル代表取締役社長)、北地達明氏(監査法人トーマツパートナー)、石井巨道氏(野村證券(株)公開引受部長)の4名、モデレータを谷内雅史氏(株東京証券取引所 上場部上場推進室新規上場サポート担当統括課長)と各務茂夫(産学連携本部事業化推進部長/教授)がつとめました。大学発ベンチャーが上場に至るまでの様々な課題が議論されましたが、同時に大学発ベンチャーがイノベーション創出において果たす役割の大きいことが再確認されました。国立大学法人化後3年半を経て、大学発ベンチャーはこれからが本番。今後大きく花を咲かせる大学発ベンチャーの出現に期待が高まりました。

総合司会は白石敬仁(本学 産学連携本部 事業化推進部 特任准教授)。



基調講演で話す今井賢一氏(スタンフォード大学名誉シニアフェロー/一橋大学名誉教授)(上)、パネルディスカッションの様子(下)

連絡先: 産学連携本部 (本部産学連携グループ) 電話: 内線22857 (外線03-5841-2857)
ホームページ: <http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/> ※「東京大学トップページ」上で「産学連携本部」をクリック



新年あけましておめでとうございます。昨年6月からのこの連載もあっという間に半年が経ち、無事2008年まで続けることが出来ました。これもみなさまのお陰です。本年もどうぞよろしくお願いたします。

さて第9回は、前回に続き寄附者の生の声をお届けしようと、社会科学研究所の丸川知雄教授にお話を伺いました。

東大への投資

—ご寄附いただいた経緯は？



きっかけは、以前教授会で部局別の寄附率を聞いた時に、社研では3人ほどしか寄附していない事を知ったことでしょうか。それで自分は大学に何が出来るだろうかと考えて、東大基金へ寄附しました。

私の基本的な方針は、身の程に合わない収入

があった時には社会に還元する、というものなので以前から赤字や国境なき医師団、地球環境関係や政党などには株や資産関連の収益を寄附していました。また留学生支援基金には、大学院のゼミ生に私費留学生が多いこともあり、着任当初からずっと寄附をしていますね。

他のきっかけとしては、仕事で中国の貧困地域にある中学校に行った時の体験があります。その学校では、遠い所から来ていた子供たちのために寄宿舎が用意されていたのですが、20人の子供に対してベッドが8台しかない。二段ベッドの下に3人ずつ、上に2人ずつで寝ているんです。そして、その教員たちは自身の生活にも余裕がないにも関わらず資金の援助をし、学校の建物も自分たちで作っていました。それを見て、非常に心を動かされましたね。東大の学生も皆お金を持っていると思われるのかもしれないけれど、格差はあります。弱者を救うには寄附が必要なのではないでしょうか。

東大基金には、世界のトップ大学を目指すため、そして困っている人を支援するためという二つの目的があると思います。ぜひバランス良く使って欲しいですね。

—教職員の寄附についてはどう思われますか？

教職員としては、東大から給料としてもらったお金を東大に返しているという抵抗感をどうしても持ってしまうのかもしれないですね。東大で学び教員となった人の中でも、私は学生の時にそんなにお金を納めてないからかあまり思いませんが、授業料など沢山払っていた人は寄附をする気になれないのかもしれない。

私は、東大基金というのは一種の投資ファンドのようなものだと思います。皆が寄附し、その集まった寄附を運用することにより、余裕が出た分例えば書庫の改修などが出来るように、上手く活用されればいいと思います。

—今後東大基金(又は渉外本部)に期待されることは？

よく日本には寄附文化がないと言われますが、それは事実だと思いますね。教職員にも一般の人にも、寄附することで税制上のメリットがあるということもまだまだ知られていない気がします。より寄附文化を広めるために税制を改正したり、寄附金を運用する時に現在のように低リスクの国債のみでの運用でなく、もっとリスクを負った投資が出来るようになると、もっと面白くなるのではないのでしょうか。

丸川先生、大変お忙しい中お話を聞かせていただき誠にありがとうございました！

先生もおっしゃっていましたが、なかなか寄附についての税制は知られておらず、分かりにくい部分かと思えます。私の復習もかねて以下に簡単にポイントを挙げましたので、ご参考までにご覧ください。もっと詳しく知りたい！という方はお電話でもメールでもお気軽にお問い合わせください。(鈴木)



寄附における税法上のメリット

＜個人の場合＞

①寄附金控除について

特定寄附金(国・地方公共団体や国立大学法人、認定NPO法人や政治活動への寄附金、etc.)の合計額から、5千円を引いた額が確定申告の際に所得控除されます。

※控除される寄附金の合計額は年間所得の40%が限度です。

②相続税の免除について

財産を相続や遺言により取得した場合に、取得者が相続税の申告書の提出期限までに国立大学法人に寄附をした場合には、寄附分について相続税は非課税になります。

◆他にも東大基金への寄附については、「みなし譲渡所得課税」免除などがあります。

基金最新情報

6,660件 12,142,602,058円

(内教職員 2,103件)

(12月28日現在申込)

教職員参加率 28.8%

連絡先: 渉外本部 鈴木
電話: 内線21744 (外線03-5841-1744)

HP: <http://utf.u-tokyo.ac.jp/index.html>

※「東京大学トップページ」上で「東京大学基金」をクリック



「さすてなTimes」
第2弾！

サステナな日々

～キャンパスから考えるサステナビリティ～

vol. 4

協力：IR3S  Integrative Research Center for Sustainability Science
サステナビリティ学
連携研究機構



サステナ（サステナビリティ；持続可能性）とは？

環境の世紀と呼ばれる21世紀の科学技術、経済システムを語る最重要のキーワード。地球社会を持続可能なものへと導くビジョンを構築するための基礎となる新しい超学的な学術が「サステナビリティ学」(sustainability science)である。

サステナビリティ学連携研究機構 (IR3S) HPより
<http://www.ir3s.u-tokyo.ac.jp/top.html>

このコラムは、サステナビリティ学を個人のライフスタイルやキャンパスと結びつけることを目指しています。

学生主導で三四郎池周辺をリノベーション！

創立130周年記念事業の一環として行われた学生企画コンテスト。「サステナな日々」編集部は、50件の応募の中から見事優秀賞に選ばれた「三四郎池のランドスケープ・リノベーション」に注目し、お話を伺いました。夏目漱石の『三四郎』発表から今年でちょうど100年。教職員、学生、市民にとって憩いの場所となっている三四郎池の今後の姿に注目が集まります。

—優秀賞受賞おめでとうございました。受賞が決まったときのお気持ちはいかがでしたか？
「興奮して叫びました(笑)。自分たちで本当にいい企画だと信じていたので、その想いが伝えられてよかったです。」

—代表の土屋君から一緒に企画したメンバーの紹介をお願いします。

「新領域創成科学研究科自然環境学専攻自然環境形成学分野M2の中山君、M1遠藤君と、農学部緑地環境学専修4年の小野田君、そして農学生命科学研究科システム学専攻緑地創成学研究室M2の私(土屋)です。4人とも、ランドスケープ、つまり緑をはじめとする自然環境の計画・デザインが専門です。」

—4人はそれぞれ学部・研究科が違いますが、どういう関係ですか？

「全員が農学部緑地環境学専修の出身で、以前から知り合いました。企画の構想自体は以前からあったのですが、とても個人で出来る話ではありません。たまたま今回の企画コンテストのポスターを見かけて、よし応募してみよう、きっと彼らなら一緒にやってくれるだろう、と思って声をかけてみたら、案の定、という感じでした。」

—改めて企画の目的と概要を教えてください。

「企画の目的は、簡単に言えば関係者のコンセンサスをふまえて三四郎池をリ・デザインすることです。三四郎池は本郷キャンパスの真ん中にある森に囲まれた池で、東大が本郷に出来る以前から存在しています。ちなみに、この130年間東大にあり続けたのは赤門と三四郎池だけなんです。このような東大の貴重な財産である三四郎池なのですが、安全面などを考えると必ずしもよい状態にはありません。この企画によって、利用者の方々の要望や環境調査を反映した、新しい設計案を提示し、実際の整備も行いたいと考えています。」

—大学から援助される資金は何に使う予定ですか？

「実は賞を頂くまで600万全て使えると勘違いして(笑)、企画の運営にかかる費用を抑えれば、実際の整備にも使えるのではないかと考えていました。ところがそうではなかったので、資金は企画の運営に主に使うことになると思います。具体的には、環境調査・アンケート調査の費用などに使う予定です。」

—学生企画コンテストの表彰式では、小宮山総長から「とてもいい企画なので是非やってほしい。でも相当大変なので覚悟して、みんなと協力してやってください。」とエールが送られていましたね。覚悟のほどはいかがですか？

「130周年企画ですし、むしろ大変でないというやりがいがないのでは(笑)。特に大変になるのは、合意形成をいかに達成する

かだと思います。今のままの自然を残して欲しいという方もいるでしょうし、逆に、開放的な空間にして安全面を改善して欲しいという方もいるでしょう。多様な意見をどうやって集約して一つの設計案に持っていくのか、これは本当に大変な仕事になると思います。」

—三四郎池とサステナとの関係についてはどうでしょう？
「三四郎池は、地球環境の変化を身近に感じ取ることが出来る場だと思います。皆さんも研究やお仕事に疲れたら、三四郎池を訪れて、人間にも自然にも優しい地球環境のあり方に思いを馳せてみてはいかがでしょうか？」

—企画の実現に向けてこれからも頑張ってください！



左から小野田君、中山君、土屋君、遠藤君(三四郎池にて撮影)

三四郎池のランドスケープ・リノベーション
企画者代表 土屋一彬
(農学生命科学研究科修士課程2年)

聖なる夜に地球環境を思う・・・

昨年12月20日～25日に<光都東京*LIGHTOPIA>皇居外苑・アンビエントキャンドルパークが開催され、2年連続で小宮山総長(IR3S機構長)の明り絵が展示されました。

このイベントは、地球環境への配慮と持続可能な社会の実現を目指し、日本を代表する著名人と小学生による明り絵を展示するもので、地球・環境・平和をテーマに描かれた作品約800点が、キャンドルのほのかな光に照らされ、クリスマスムードを盛り上げていました。写真中央の総長の作品に描かれているのは、本コーナーでも活躍中のIR3Sのキャラクター「サステナ君」です。



問い合わせ先：本部研究機構等支援グループ(内線21387)





ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信 第3回～



東大ナビはこうして作られる！

東大ナビでは、収集したイベント情報を隔週更新の携帯サイト・隔週発行メールマガジンでお届けしています。

今月は、これらのコンテンツがどのように作られ、皆様へ届けられているのか、そのプロセスをご紹介します！

イベント情報を集める

東大ナビに掲載するイベント情報は、本部広報グループに集められたものや、各部署の皆様から寄せられたものを元に作成しています。最近では毎月多くの部署より、掲載のご依頼を頂いており、毎号3件前後の新しいイベント情報をご紹介します。

東大ナビでは現在590名（2008年1月現在）の方々、メールマガジンをご登録頂いており、登録者は学部生、院生、教員、学外の方々など多種多様です。

各部署の広報担当の方々と、イベントの宣伝・周知をお考えの方は、是非info@tree.ep.u-tokyo.ac.jpまでご一報ください！

編集会議

隔週火曜日に、携帯サイト・メールマガジンのコンテンツを考える編集会議を開いています。ここでは収集したイベント情報をもとに、学生スタッフが中心となり、掲載する文章やレイアウトを検討します。

東大ナビは携帯電話を媒体としたサービスのため、どうしても文章の長さが制限されます。小さい画面では長い文章はどうしても読みづらく、長々とした紹介文では、受け側にとってはイベントの魅力も半減してしまいます。

そこで編集会議では、イベントの要点や魅力を簡潔に表すフレーズを考えます。携帯サイトやメールマガジンの読者の多くは学生ですので、学生スタッフの視点から理解しやすいような紹介を心がけることも、大事なポイントです。

また携帯サイト・メールマガジンではイベント情報のほかにも、学生にとって魅力的なコンテンツも用意しています。これを考えるのも編集会議での大事な仕事です。昨年から大学祭の見所や、就職活動を昨年経験した先輩からのメッセージなどを掲載し、好評を頂いています。

この会議を経て作られたコンテンツは、携帯サイト・メールマガジン作成システム上で作成され、配信されます。

（右）編集会議の様子。学生スタッフが、彼らの視点からコンテンツを仕上げる



（左）携帯サイト・メールマガジン作成システムの画面
ブラウザを使いサイトの更新・メールマガジンの編集・配信の作業を行います



東大ナビとは？

学内外に向け携帯電話を通じて教育イベント情報をお届けするサービスです。携帯サイトで学術俯瞰講義や公開講座、学内で開催される教育イベント情報を宣伝します。

加えて、QRコードや空メール送信によりメールアドレスを登録した皆様の携帯電話に、最新の教育イベント情報を、メールマガジンで定期的にお届けします。学内教育イベントの情報収集・広報活動の媒体としてご利用頂けます。

是非、東大ナビをご活用ください！



イベント情報を受けたい方

mail@utnav.jpに空メール送信！

- この記事のQRコードから
- mail@utnav.jp宛てにメール送信
- 携帯サイトutnav.jpにアクセスしてメルマガ登録ページへ
- ※携帯電話・PCどちらからも登録可能



返信メールから登録画面に入力！

- ご所属
- 性別・年齢など



登録完了！

- 登録確認メールが届きます
- 隔週でメルマガ・お得なクーポンGET！



イベントを宣伝したい方

教育企画室TREEオフィスまで！

- 内線；27823（重田）
- メール；info@tree.ep.u-tokyo.ac.jp
- オフィス；本郷キャンパス 第二本部棟401号室

コミュニケーションセンターだより No.43

■新商品のご紹介

■「東京大学アクション・プラン ガイドブック2008」

●価格：1,650円（税込）

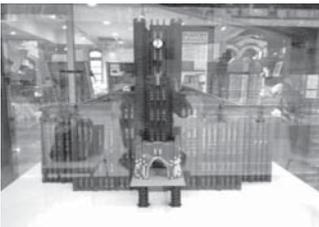


「東大」をぐぐっと理解できる。
「世界」をすーっと見渡せる。
未来を感じる一冊です。
コミュニケーションセンター限定
小宮山総長からのメッセージ入り
帯が付いています。

■文京博覧会2007出店報告

昨年12月6日(木)・7日(金)に文京シビックセンターで行われた「ぶんぱく」にコミュニケーションセンターも出店いたしました。文京区内の産業を区民のみなさまに紹介し、盛り上げていくためのこのイベントで東京大学とコミュニケーションセンターを多くのみなさまに知っていただけたと思います。普段の学内イベント出店とは雰囲気の違いで、スタッフ一同勉強になりました。

■店内展示リニューアルしました



■レゴブロックによる安田講堂

創立130周年事業の一環として、展示スペースにて展示しています。東大レゴ部による、五月祭で人気投票1位に輝いた力作です。裏側、細部までよくご覧下さい(3月末まで展示予定)



■「東京大学百三十年DVDコーナー」

現在販売中の「東京大学百三十年」のDVDコーナーを作りました。130周年記念式典で流された10分間のダイジェスト版をご覧ください。コミュニケーションセンターにてひととき、東京大学の歴史を振り返ってみたいではないでしょうか。



■秩父演習林もみの木

今年も秩父演習林から大変立派なもみの木をいただき、クリスマスツリーとして展示しました。沢山のお客様にお褒めの言葉を頂きました。秩父演習林の皆様ありがとうございました。(展示は終了しました)

(担当：コミュニケーションセンター 吉岡)



東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

The University of Tokyo

OPEN：月曜～土曜 10：30～18：30

電話：03-5841-1039

http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp

わたしのオシゴト / 第23回

Rings around the UT

法学部 会計係

奥 雄一さん

法律よイトコ、一度はおいで

東大に採用されてもうすぐで丸4年、財務部から法学部に配属になってはや半年が経とうとしています。法学部及び公共政策大学院の大学運営費・受託研究・共同研究に係る物件費の管理及び資産管理というのが、現在担当している仕事の大きな柱です。特に資産関係では、事務室のある法文1号館・2号館は文化財にも指定されており、歴史と伝統を感じます。こんな所で働けるなんてさすが東大！！



商売道具を片手に

仕事の範囲が広く、まだまだ覚えなければいけないことがたくさんあり、周りの皆さんにいつも助けて貰っているので、早く独り立ちできるように日々精進、と思う毎日です。

また、かなりの食いしん坊なので、打倒ギャル曾根を目標に仕事後や休日には色々なお店で食い倒れています。そのせいか、最近だいたいメタボリック気味ですが、こんなことにめげずにがんばってきたいです。



法学部会計軍団

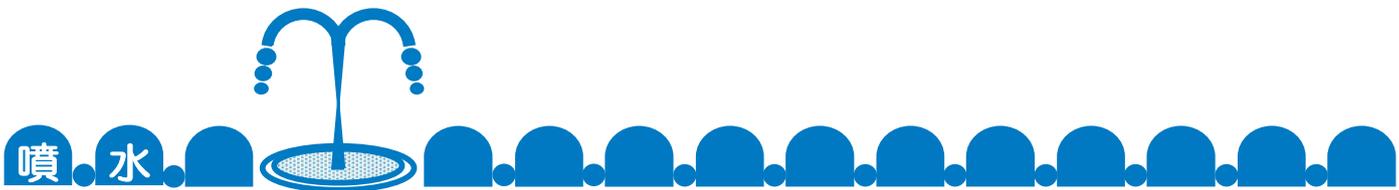
得意ワザ：大食い

自分の性格：風の吹くまま、気の向くまま

次回執筆者のご指名：丹藤 寛子さん

次回執筆者との関係：そば派とうどん派

一言紹介：とってもキュートなお方ですが、よくアルコールの海で溺れているようです！？



教育学部附属中等教育学校で1年総合学習第2クール発表会がおこなわれる

11月22日(木)の3、4時間目に、1年総合学習の発表会がおこなわれた。1年総合学習では、4、5月の「東大研究」を学年全体でおこなったあと、6、7月を第1クール、9～11月を第2クール、12～2月を第3クールとして、異なったテーマの学習をクラスごとにおこなう。第2クールでは、A組が「情報とメディア」、B組が「国際理解」、C組が「サバイバル」をテーマに学習した。当日は、生徒がそれぞれのテーマについて学習した内容を発表した。発表会には保護者の方々にもご参加いただいた。第2クールの「国際理解」では、ロシアについて学習した。ロシアからの留学生で、東京大学大学院生であるゴロウィナ・クセーニャさんから、ロシアの気候や文化、交通、歴史について話を聞いた。また、ロシアの代表的な料理であるボルシチの調理実習もおこなった。

「国際理解」の発表会では、生徒が5人1グループになり、「ロシアのNo. 1」や「ロシアの建造物」など8つのテーマについてそれぞれ10分間発表した。

「発表を通じて、ロシアの食べ物、ロシアの民族衣装、ロシアのイベントなど自分が知らなかったものが、よりくわしく学べたので良い機会になりました」「クセーニャさんの話はどんな本の資料よりもわかりやすくおもしろくてとてもよかったです」と、実際にロシアからの留学生との交流を通して、資料だけでは調べられないロシアについて学んだ。また、「第1クールの調べ学習よりも計画的に準備ができたことが良かったです」と、総合学習でのグループ学習を通して、調査、発表の技術に進歩を実感した生徒もいた。



ロシアの建造物に関する発表の様子

教育学部附属中等教育学校で平尾公彦副学長の特別授業が行われる

11月30日(金)教育学部附属中等教育学校において、平尾公彦副学長特別授業「ミクロの世界-量子論と相対論-」が行われた。1年生から6年生(中学1年から高校3年)約80名と保護者、教職員が熱心に聴講した。

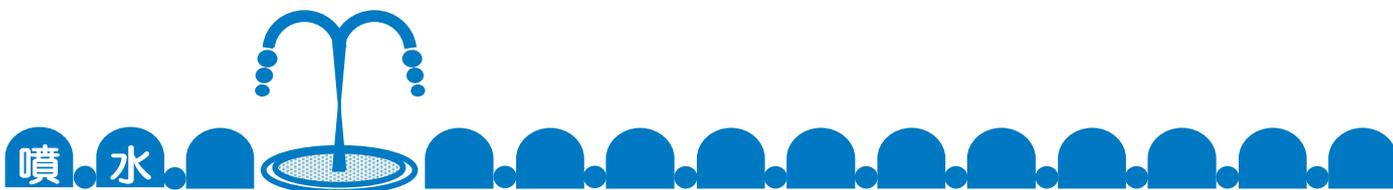
はじめに、科学技術の重要性と21世紀の科学技術の方向性について、中学生・高校生に分かりやすく説明していただいた。「科学技術は『自由』を獲得するための人間の活動である」と述べられた。「20世紀の科学技術のトップ20」と「過去四半世紀の技術革新のトップ25」を紹介され、多くの科学技術が軍事的で開発されてきたことを指摘された。その上でこれからは、「調和の21世紀」として「精神的豊かさ」を得るための科学技術、「Peace engineering」へと発展していくべきだと述べられた。

後半は「ミクロの世界」についてご講義くださった。生元素、理論化学とは、微細構造因子、ミクロとマクロの架け橋としてのアボガドロ定数、光と電子など、できるだけ数式を使わず説明された。生徒たちは、難しい話だけれども、よく聞いて理解しようと努力していた。

講義の最後に中学生・高校生に望むこととして、「数学をしっかりと勉強しておこう」「英語は世界共通語」「現代史をきちんと勉強しよう」「知の憧憬と畏敬の念を」の4点を挙げられた。今の子どもたちにこれからの科学技術の発展に関わって欲しいとのメッセージが込められていた。生徒からの質問にも丁寧にご答えてくださった。



平尾副学長の講義の様子



医学部生による医学部本館の電飾

2003年から恒例になっている鉄門M0（前期課程教養学部2年医学部医学科進学内定者）・M1（医学部医学科3年生）生有志による褐色レンガ医学部本館電飾の設置作業が12月7日（金）、9日（日）11日（火）の3日間で行われました。今年は、M1の寺川君が代表になって各基礎・臨床教室を回って寄附を集め、新たにLEDやタイマーなどを購入しました。初期に購入した電球は例年沢山壊れてしまうので、設置前に点検し修理や処分作業を行いました。2004年から毎年お世話になっている医学系研究科施設系の松下さんからコードリールドラム10個・ワゴンモールドラム2巻や梯子2台を借用し、医学部防災センターから屋上の鍵や地下倉庫の鍵をお借りして屋上やバルコニーの配線を施しました。寒くて暗い中、ロータリーの配線は設計図を見つつ切れていく電球の実状に合わせて設置しました。本館前にあったロータリーのイヌツゲやオオムラサキツツジが「知のプロムナード」企画で撤去されましたので、中央にポールを立ててLEDを飾りました。今回はじめてロータリーの外側にも「雪だるま」と「2007年」の電飾を施すことができたので昨年より広い空間を感じました。点灯期間は12月半ばから1月10日（木）までで、17時ごろから23時ぐらいまで点灯していました。獣医学生による農学部のイチョウの電飾や病院中庭のイルミネーションとともに2007年本学の年末を飾っていました。ご寄附頂いた医学部の各教室の方々ならびに設置作業等にご協力・ご高配賜りました教職員の方々に厚く御礼申し上げます。



12月9日 電飾設置メンバーと医学部本館正面



12月11日 電飾設置メンバーと雪だるま

INFORMATION

シンポジウム・講演会

シンポジウム・講演会

サステナビリティ学連携研究機構

公開討論会「徹底討論・温暖化問題～ポスト京都議定書を見据えた日本の戦略～」開催のお知らせ

2012年までの京都議定書の達成をどうするか。京都議定書以降を見据え、日本は国内で、また国際社会でどういった戦略で温暖化問題に臨むべきか。さらには、問題解決の鍵を握る開発途上国、とりわけアジアの国々との新しい関係をどう構築していくのか。途上国協力の現場を知る国際協力銀行（JBIC）の共催を得て、待ったなしの温暖化問題に日本の経済界、アカデミア、そして社会が、どのように行動していくべきかを産業界の代表者を招いて徹底的に議論します。是非ご参加くださるようお願い申し上げます。

日時：2月16日（土）13：30～17：30

場所：安田講堂

主催：東京大学 サステナビリティ学連携研究機構（IR3S）

共催：国際協力銀行（JBIC）

協賛：日本経済新聞社

参加費：無料

申し込み方法：下記ホームページからお申し込みください。受講券メールを先着順にて事務局より発送いたします。なお、定員になり次第締め切らせていただきます。
<http://www.ir3s.u-tokyo.ac.jp>

プログラム（敬称略）：

13:30～ 開会挨拶

住 明正 東京大学地球持続戦略研究イニシアティブ（TIGS）統括ディレクター・教授

13:35～ 講演 1

「IPCC 第4次評価報告書のまとめ」

三村 信男 茨城大学地球変動適応科学研究機関（ICAS）機関長・教授

13:50～ 講演 2

「2050年へのシナリオ」

西岡 秀三 国立環境研究所 参与

14:05～ 講演 3

「ポスト京都議定書枠組みに途上国の関与を得るために」

荒川 博人 国際協力銀行開発金融研究所 所長

14:20～ 休憩

14:40～ 公開討論

パネリスト 荒川 博人

西岡 秀三

三村 信男

植田 和弘 京都大学大学院 教授

西條 辰義 大阪大学社会経済研究所 教授

榊本 晃章 東京電力株式会社 顧問

松橋 隆治 東京大学大学院 教授

森嶋 昭夫 地球環境戦略研究機関（IGES）特別研究顧問

モデレーター 住 明正

17:00～ パネル討論を終えて

小宮山 宏 東京大学総長・IR3S 機構長

17:30 閉会

問い合わせ先：本部研究機構等支援グループ

内線：21387

メール：kikoushien@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



公開討論会ポスター



昨年のシンポジウムの様子

お知らせ

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第508（1月9日）号の発行
——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。

第508号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

今橋映子：駒場美術博物館 資料室オープン
——学際的展覧会カタログの宝庫

松原 宏：駒場祭を探検する

箸本春樹：駒場の樹木

真船文隆：〈学び方新シリーズ〉化学の学び方「根底にある法則の理解と化学物質に対する勘」

細野 忍：〈学び方新シリーズ〉大学での数学の学び方と接し方

久保田俊一郎：身体運動教育のカリキュラム改革〈4〉基礎科目（身体運動・健康科学実習）の紹介

渡會公治：身体運動教育のカリキュラム改革〈5〉「救急処置」授業

木村秀雄：「人間の安全保障」プログラムと世界をつなぐ～二つのシンポジウムから

数理科学研究科：新たな数学の創造をめざす「高木レクチャー」開催

後藤則行：ノーベル平和賞がアル・ゴア前米副大統領と国連「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）」に授与——新たな地球平和創造への大きな一歩

遠藤泰生：アメリカ太平洋地域研究センター公開シンポジウム「反米：その歴史と構造」

永田 敬：KALS

——駒場アクティブラーニングスタジオ

旭 英昭：〈時に沿って〉心の中の駒場

原 和之：「教育について語ること」から「教育すること」へ

——東アジア4大学フォーラム報告

開 一夫：駒場「赤ちゃんラボ」へようこそ

お知らせ

情報基盤センター

“情報探索ガイダンス” 各種コース実施のお知らせ

情報基盤センター図書館電子化部門では、レポート・論文作成や学習・研究に役立つ“情報探索ガイダンス”各種コースを実施しています。

本学にご所属であればどなたでも参加できます。

●会場：

本郷キャンパス 総合図書館1階 講習会コーナー
(定員12名 予約不要です。直接ご来場ください。)

●スケジュール：

- 2/4 (月) 13:30～14:30 Web of Science (日本語)
- 2/12 (火) 15:00～16:00 Web of Science (English)
- 2/15 (金) 16:30～17:30 電子ジャーナルを利用するには？
- 2/28 (木) 16:00～17:00 Web of Science (日本語)
- 3/7 (金) 15:00～16:00 自宅から検索するには？
- 3/13 (木) 11:00～12:00 電子ジャーナルを利用するには？
- 3/19 (水) 15:00～16:00 図書館の蔵書を検索するには？

●コース概要：

<データベースユーザトレーニング>

特定のデータベースの使い方について、検索実習を交えながら解説します。

■ Web of Science (60分)

全分野の主要な学術雑誌(約9,300誌)に掲載された論文のデータベースです。通常のキーワードによる検索に加え、引用文献をキーにした検索も可能です。

今回のコースでは、新しくなったインターフェースを紹介します。また、ガイダンス終了後、ご希望の方に、文献管理ソフト“EndNote Web”の基本的な使い方を説明します(30分程度を予定)。

同じ内容で2回開催します。

<テーマ別ガイダンス>

1つのテーマに沿って、検索実習を交えながら解説します。

■ 電子ジャーナルを利用するには？ (60分)

電子ジャーナルにアクセスする方法や、代表的な出版社の電子ジャーナルサイトを例にとって実際の利用方法を解説します。新しいサービス“東京大学学術論文横断検索(UT Article Search)”や“UT Article Link”を使って、データベース検索結果から電子ジャーナルへアクセスする方法も紹介します。

同じ内容で2回開催します。

■ 自宅から検索するには？ (60分)

学内・学外を問わず利用できる無料公開のデータベース・電子ジャーナルなどを紹介します。また、通常は学内からのみ利用可能なデータベース・電子ジャーナルでも、手続きをして学外から利用できるものがありますので、その方法を紹介いたします。

さらに、帰省先や海外で図書館を利用したい人向けに、他大学等の図書館を利用する際の手続き・注意点を説明します。春休み前におすすめのコースです。

■ 図書館の蔵書を検索するには？ (60分)

本学および学外の図書館も含めて、図書館の膨大な蔵書を活用するために、ネットでできる蔵書検索をマスターしましょう。

“東京大学 OPAC”(蔵書目録データベース)の使い方を中心に、図書館の蔵書を検索できるいろいろなデータベースを紹介します。

< Database User Training (English Session) >

■ Web of Science Course (60 minutes)

2/12 (Tue.) 15:00～16:00

Covers articles published in major academic journals (about 9,300 journals).

In addition to conventional searches by keyword, it provides information on citation inter-connections.

No advance reservation is required.

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/e/training-e.html>

●問い合わせ：

学術情報リテラシー係

03-5841-2649 (内線：22649)

literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

お知らせ

本部学生支援グループ

平成19年度第2回「東京大学総長賞」の募集について

本学の学生を対象として、学業、課外活動、各種社会活動、大学間の国際交流等の各分野において、「優れた評価を受けた」「優秀な成績を収めた」「本学の名誉を高めた」などの顕著な功績のあった個人又は団体に、総長が表彰を行う「東京大学総長賞」が平成14年度から設けられています。

この表彰は、「東京大学学生表彰選考委員会」(以下「選考委員会」という。)が選考にあたり、総長が表彰するものです。

選考委員会では、推薦された候補者の中からその内容を審査のうえ、「東京大学総長賞」として相応しいものが決定されます。

第2回(春)は学業のみを対象に募集し、推薦者は各学部長及び各研究科長・教育部の長のみとなります。また、第2回(春)には年間の授与者の中から特に優秀な者に対し、総長大賞が授与される予定です。

記

1. 申請書類：別紙様式1(個人)又は別紙様式2(団体)に必要事項を記入し、参考資料等を添付してください。なお、選考時の参考とするので、推薦理由欄には推薦にあたって留意された点(所見等)や選考経過等についても併せて記入し、参考書類(写も可)を添付してください。また、専門分野に関わらず、誰にでも理解しやすい表現にて記述願います。
2. 推薦基準：以下のとおりです。
3. 提出期限：平成20年3月7日(金)正午迄(必着)書類の提出にあたってはホームページ(http://www.u-tokyo.ac.jp/stu01/h12_j.html)上の「推薦書類の提出について」を参照してください。
4. 選考結果：3月中旬に推薦者及び受賞者へご連絡します。
5. 授与式：平成20年3月24日(月)17時より小柴ホール(理学部1号館)にて実施を予定しています。



昨年度の授与風景

【本件に関するお問い合わせ】

本部学生支援グループ学生生活チーム

担当：宮内・小林

内線：22514・21205

E-mail：gakuseiseikatsu@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

平成18年6月28日
学生表彰選考委員会

東京大学学生表彰「東京大学総長賞」推薦基準

東京大学学生表彰実施要綱(平成14年3月19日総長裁定、平成18年6月28日改正)第3に基づき、推薦の基準を以下のとおりとする。

- (1) 学業において、研鑽に励み、他の学生の範となった個人若しくは団体又は学界等により優れた評価を受け、本学の名誉を高めた個人若しくは団体
- (2) 課外活動において、国内外の各種スポーツ、競技、演奏、展示、発表等で優秀な成績を収め、本学の名誉を高めた個人若しくは団体又は課外活動を支援し、課外活動の充実と振興に著しい貢献をした個人若しくは団体
- (3) 環境保全、災害救援、社会福祉、青少年育成、海外援助協力等の各種社会活動において、活動実績が認められ、他の学生の範となった個人若しくは団体又は社会的に優れた評価を受け、本学の名誉を高めた個人若しくは団体
- (4) 大学間の国際交流において、相互理解と友好関係を深め、本学の国際交流の発展に著しい貢献をした個人又は団体
- (5) その他、これらに準ずるもので、「東京大学総長賞」に相応しい貢献があった個人又は団体

上記基準による推薦者については、自薦又は他薦とする。

ただし、基準(1)の推薦者は、学部学生については学部長、大学院学生については研究科長・教育部の部長に限る。

なお、年2回の授与のうち、第1回目(秋)の推薦は上記基準の(2)~(5)を、第2回目(春)の推薦は基準の(1)をそれぞれ対象とする。

また、在学中の学業、課外活動、社会活動等の評価、活動実績等が上記基準に該当する者は、卒業又は修了後1年以内に限り選考の対象とする。

人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

発令日	氏名	異動内容	旧（現）職等
（退 職）			
19.12.31	高取 吉雄	辞 職（大学院医学系研究科寄付講座教員）	大学院医学系研究科准教授
19.12.31	COFFIN MILLARD FILMORE	辞 職	海洋研究所教授
（採 用）			
19.12.16	池田 博	総合研究博物館准教授	
20.1.1	内田 和幸	大学院農学生命科学研究科准教授	宮崎大学農学部助教
20.1.1	TRIBELSKIY Mikhail	大学院数理科学研究科教授	
20.1.1	佐竹 健治	地震研究所附属地震予知情報センター教授	独立行政法人産業技術総合研究所活断層研究センター上席研究員
20.1.1	Webb Jason Paul	東洋文化研究所准教授	
（昇 任）			
20.1.1	佐々木 猛智	総合研究博物館准教授	総合研究博物館助教
20.1.1	松崎 政紀	大学院医学系研究科附属疾患生命工学センター准教授	大学院医学系研究科附属疾患生命工学センター助教

※退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

斎藤 信房 名誉教授



斎藤信房名誉教授（化学専攻）は、ご療養中のところ2007年12月19日に逝去されました。享年91才でした。先生は、1940年に東京帝国大学理学部化学科をご卒業、京城帝国大学理工学部助教授で終戦を迎えられました。その後、九州帝国大学理学部助教授を

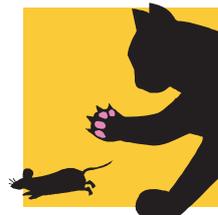
経て、東京大学理学部に助教授として着任され、1956年教授に昇任、無機化学講座を担当されました。以来1977年のご停年まで理学部で研究と教育に尽力されました。また、理化学研究所の主任研究員も兼ねられました。1970年からは、先生のご尽力で新設されたアイソトープ総合センターの初代センター長もつとめられました。ご停年後は、東邦大学理学部教授・理学部長、また1990年以降は、(財)日本分析センターの理事長、会長を歴任されました。また、日本化学会や日本分析化学会の会長のほか、国内の原子力・放射線関係の委員会、審議会、国際原子力機関 (IAEA) などでも活躍されました。

先生のご研究は、温泉沈殿物や鉱物・岩石など天然物中の同位体の分布に始まり、無機化合物の核反応で生じた励起原子や分子の特異な挙動（ホットアトム化学）、線源からの放射線の共鳴吸収を化学状態のプロープに用いるメスバウアー分光法の新たな応用の開発など、無機同位体化学・放射化学の広い分野にわたり、優れた業績を残され、日本化学会賞、紫綬褒章、勳二等瑞宝章を受けられました。

ちょうど50年前、私が卒業研究で師事してから、誠実で、温厚な中にも厳しい紳士という先生の印象が変わることはありませんでした。明治大正生まれの学者の風格、あるいは「品格」とでもいうのでしょうか。先生にはそれを感じました。ゆえに私たちの尊敬の念も一層深まったのです。先生のモットーは、「100点満点を目指さず、自然体で80点を目標に」というものでした。それでも私には、先生の達成されたことは万事100点以上に感じられました。100点をとると公言しながら実は80点しかとれないような後進への戒めかもしれませんが。不肖の弟子達にとって、先生の温容に接し、まだまだご教示を乞いたいと願っていた矢先の訃報は誠に残念でなりません。ここに心から先生のご冥福をお祈り申し上げます。

(大学院理学系研究科)

表紙写真解説



遅ればせながら、あけましておめでとうございます！

さて、今回は新年最初の号ということで、例年通り干支の動物に表紙を飾っていただきました。しかしこのマウス、ただのマウスではありません。ねずみといえば猫が天敵！
…のはずですが、今回登場したマウスと猫は、どの写真でもとっても仲良しです。なぜでしょう？
その秘密はすでに新聞等でご存知の方も多いかとは思いますが、まだの方は是非下の説明をご覧ください。



さらに詳しい説明は、本学HP上の「学術情報」欄をご覧ください。



自然界にもともと存在する野生型のマウスは、天敵である猫のにおいがすると恐怖を感じて、すぐんでしまったり逃げ出したりします。マウスが猫を怖がるのは当たり前と思われるかもしれませんが、しかし、脳が恐怖を感じる仕組みを科学的に解明することはとても難しく、これまでなぜマウスは猫のにおいを怖がるのかはよく分かっていませんでした。におい分子は鼻の奥にある嗅細胞と呼ばれる神経細胞によって感知されています。

写真のマウスは、遺伝子操作の技術を使うことで、嗅細胞の一部が生まれながらにして機能しないように細工がしてあります。この遺伝子操作マウスは野生型のマウスと同じように、天敵のにおいそのものを感じることができるのに、危険であると判断して逃げ出すことができませんでした。写真を撮影した猫はおとなしく、餌をたくさんもらっていたので、マウスを襲いませんでしたが、本来ならばとても危険な状況でしょう。また、この遺伝子操作マウスは、頭が悪いのではなく、後天的に学習させれば、危険なにおいを理解することもできます。このマウスは私たちに、猫のにおいが怖いのは遺伝子が先天的に決めていることを教えてくれたのです。

大学院理学系研究科生物化学専攻 特任助教 小早川 高

Contents

特集

- 02 表紙にみる学内広報 40 年のあゆみ
- 04 東京大学創立 130 周年記念学生企画コンテスト表彰式

NEWS

一般ニュース

- 06 ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構
盛況だったナノ量子情報エレクトロニクスシンポジウム
- 06 ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構
初の「企業集中講義」を実施 大学院生が民間企業で受講
- 07 本部学生支援グループ
第 54 回総長杯争奪水上運動会が開催される
- 08 本部キャリアサポートグループ
平成 19 年度第 3 回学生窓口業務担当者講習会を開催
- 08 本部業務改善グループ
2007 年度業務改善「総長賞」表彰式

部局ニュース

- 09 大学院総合文化研究科・教養学部
小宮山総長、高校生たちに語る
- 10 大学院工学系研究科・工学部 (ナノバイオ・インテグレーション研究拠点)
CNBI/CNSI 合同シンポジウムの報告
- 11 生産技術研究所
千葉実験所公開開催される
- 12 生産技術研究所
千葉実験所に「生産技術研究所 千葉試験線」敷設
- 12 大学院人文社会系研究科・文学部
第 11 回東京大学文学部常呂公開講座が開催される
- 13 東洋文化研究所
東洋文化研究所シンポジウム「第 3 回アジア古籍保全講演会」を開催
- 14 大学院農学生命科学研究科・農学部
東大農場の収穫祭が開催される
- 14 海洋研究所
防災訓練を実施
- 15 物性研究所
物性研究所
物性研究所
物性研究所
- 16 大学院人文社会系研究科・文学部
外国人留学生見学旅行を実施
- 16 東京大学 21 世紀 COE プログラム「機械システム・イノベーション」
総括シンポジウム—機械工学が拓く未来 技術を極め、人を育てる— 開催される
- 17 大学院農学生命科学研究科・農学部
自衛消防訓練を実施
- 17 医学部附属病院
「附属病院 外来棟での防災訓練」、実施される
- 18 大学院総合文化研究科・教養学部
「三鷹市民と三鷹国際学生留学生との集い」開催される
- 19 大学院教育学研究科・教育学部
伝統芸能鑑賞教室「雅楽」を楽しむ

- 19 大学院農学生命科学研究科・農学部
吉川牧場長が山口笠間市長を表敬訪問

キャンパスニュース

- 21 本部留学生支援グループ
平成 19 年度外国人留学生数—国費外国人留学生数 973 人、私費外国人留学生数 1,430 人、外国政府派遣留学生数 24 人、在日外国人留学生数 198 人—

コラム

- 25 Crossroad ～産学連携本部だより～ vol.26
- 26 Step by Step 東大基金通信 第 9 回
- 27 サステナな日々
～キャンパスから考えるサステナビリティ～ vol. 4
- 28 ケータイからみた東大 ～東大ナビ通信 第 3 回～
- 29 コミュニケーションセンターだより No.43
- 29 Relay Column「ワタシのオシゴト」 第 23 回
- 30 噴水 教育学部附属中等教育学校で 1 年総合学習第 2 クール発表会がおこなわれる
- 30 噴水 教育学部附属中等教育学校で平尾公彦副学長の特別授業が行われる
- 31 噴水 医学部生による医学部本館の電飾

INFORMATION

シンポジウム・講演会

- 32 サステナビリティ学連携研究機構 (IR3S)
公開討論会「徹底討論・温暖化問題 ～ポスト京都議定書を見据えた日本の戦略～」開催のお知らせ

お知らせ

- 33 大学院総合文化研究科・教養学部
「教養学部報」第 508 (1 月 9 日) 号の発行——教員による、学生のための学内新聞——
- 34 情報基盤センター
“情報探索ガイダンス” 各種コース実施のお知らせ
- 34 本部学生支援グループ
平成 19 年度第 2 回「東京大学総長賞」の募集について

36 人事異動 (教員)

- 37 訃報 斎藤信房名誉教授

38 表紙解説

淡青評論

- 40 国際交流で大学の力を示せ

編集後記

寒い日が続き、早く暖かくなってほしいなあと思う反面、そろそろ花粉症の症状が出はじめるのではないかと毎日怯えています。花粉が飛散するのはもう少々先かも

しれませんが、風邪、インフルエンザが流行っています。何かと体調を崩しやすいこの季節、皆さまもご自愛下さい。(た)



七徳堂鬼瓦

国際交流で大学の力を示せ

1990年代に米国から麻疹輸出国の烙印を押された日本では、近年麻疹の排除を目指してワクチン接種率の向上をはかり、2006年6月からは小学校就学以前にワクチンを2回接種する施策を始めたばかりであった。ところが、2007年になって関東を中心とした高校や大学で麻疹が流行し、保健センターの発表によれば本学でも約90人が麻疹の診断を受けた。本来麻疹の頻度が高い乳幼児ではなく、法律で15歳以上と規定されている成人麻疹の流行が2007年の大きな特徴であった。1989年

に開始された麻疹・流行性耳下腺炎・風疹混合（MMR）ワクチンによる無菌性髄膜炎が社会問題化し、1993年にMMRワクチンが廃止されたこと、1994年の予防接種法の改正により予防接種は国民の義務（義務接種）から努力義務（勧奨接種）へと変わったことなどから、1990年代にワクチン接種率が低下した。防御免疫を持たない人たちが学校という集団生活の場に一定レベル以上存在したことが、2007年の成人麻疹流行の下地にあった。

感染症には潜伏期があるから、修学旅行先のカナダで高校生一人が麻疹を発症し、残りの生徒も滞在先のホテルに一時「隔離」され検査を受けた。大規模な航空機輸送が可能な現在、感染症を国内問題としてのみ捉えることはできない、という一例である。目をアジアに転じれば、発展著しいアジアの国々と日本の経済交流に拍車がかかっている。アジアの国々にはまだ“発展途上”の部分が残りと、熱帯に位置する国も多く、結核、HIV、肝炎など感染症の負荷はいまだに高い。SARSや高病原性インフルエンザのように社会的インパクトの大きな感染症もアジア発のものが増えている。感染症を含む健康政策の上でアジアとの協力関係がきわめて重要だと考える。省庁を含む国のシステムは、あるものは内向き、あるものは外向き、と老朽化、強直化しているため、包括的な捉え方や展望をしかねている。国際的な視野にたった大学の役割に対する期待は大きく、学部学生や大学院生の相互派遣、海外共同研究拠点の推進など、人材育成を含めた観点から大学発の国際交流を強化し、発展させていくべきであると思う。

岩本愛吉（医科学研究所）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報グループを通じて行ってください。

No.1368 2008年1月24日
東京大学広報委員会

〒113-8654
東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学本部広報グループ
TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
<http://www.u-tokyo.ac.jp>